



河川
基金

公益財団法人河川財団による
河川基金の助成を受けています。



第17回

川に学ぶ体験活動全国大会 in 北九州（紫川流域）

テーマ

川の力、川の魅力を知る
（公害の街から蘇った紫川を体験）

報告書

開催年月日：平成29年10月14日（土）～15日（日）

メイン会場：北九州芸術劇場 中劇場、紫川流域

主催：第17回川に学ぶ体験活動全国大会 in 北九州実行委員会

共催：NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会（RAC）

主催：第17回 川に学ぶ体験活動全国大会 in 北九州実行委員会

共催：NPO法人川に学ぶ体験活動協議会（通称 RAC）・北九州市

後援：国土交通省・文部科学省・公益財団法人河川財団・公益社団法人日本河川協会
公益財団法人リバーフロント研究所・福岡県

協賛：公益財団法人タカミヤ・マリバー環境保護財団・福岡県河川協会・各企業

報告書目次

■活動記録

○1日目

プレイベント、アフターイベント カヌー・SUP・E ボート体験	2
オープニングイベント	2
開会式	3
基調講演 【演 題】『川の生き物の暮らしと洪水対策の調和を考えた川づくり』	4
【講 師】 安田 陽一 氏 日本大学工学博士	
活動事例報告	4
交流会	11

○2日目

分科会 〔第1分科会、第2分科会、第3分科会、第4分科会〕	12
分科会報告～パネルディスカッション～	12
全体会（閉会式）	13

■資料編① 講演録、議事録要旨

基調講演	14
分科会	
第1分科会	16
第2分科会	24
第3分科会	27
第4分科会	30
分科会報告～パネルディスカッション～	33

■資料編② 実行委員会名簿

48



活動記録

1日目 10月14日（土） 午前の部 会場：紫川周辺

○プレイベント カヌー・SUP・E ボート体験 10:00～12:00

※10月15日（日）の午後にもアフターイベントとして行いました



1日目 10月14日（土） 午後の部 会場：北九州芸術劇場 中劇場

○オープニングイベント 12:30～13:00



小倉祇園太鼓

○開会式 13:00 ～ 13:30

【主催者挨拶】

実行委員長 内村 政彦（NPO 法人 川塾北九州）

RAC 代表 久住 時男（新潟県見附市長）

【祝 辞】

国土交通省国土交通省 水管理・国土保全局 河川環境保全調整官 奥田 晃久

【歓迎挨拶】

北九州市長 北橋 健治

■主催者挨拶 実行委員長 内村 政彦（NPO 法人 川塾北九州）

みなさん、ありがとうございます。ようこそお出でくださいました。実は、本大会を北九州で開催するのは今回で 2 回目です。平成 14 年に参加された方おられました挙手をお願いします。5, 6 人おられます。2 回も来ていただいて嬉しいです。その時のテーマが「川と人との絆」でした。川と人とのいい関係と、川の指導者の育成について学びました。まだまだ自分達も若く、あれから 15 年間ずっと活動を続けてきました。そして分かったことが 2 つあります。1 つは「川の力」です。川の体験活動を行うと、子供たちが元気になります。そして笑顔になります。そして生きる力がつきます。2 つ目は「川の魅力」です。川で遊ぶとたいへん楽しいです。そして癒されます。そして健康になります。川と人と街が繋がって、にぎわいになります。そして街が明るくなります。この 2 つを今回の大会のテーマとしました。

今回大会に来られた皆さんは超ラッキーです。そして超お得です。何故かと申しますと講演する方々が素晴らしいです。最初に講演される安田先生は日本大学の教授ですが、私は石工の方があってと思います。石組み魚道のプロです。それと、アメリカの土木学校の論文賞をダブルで受賞されているすごい方です。その後、北九州の 5 つの素晴らしい若い団体に発表いただきます。熟年の方もおられました。次に、全国から 3 つの団体に発表いただきます。非常に感動する話になると思いますので楽しみです。あと、夜の部は、交流会を紫川の河畔で開催する予定ですが、雨模様なので、会場を変える予定があります。15 年前、川屋台を勝山橋の上でしました。その川屋台を発展させた、カナルビオラというキッチンカーで行いたいと思います。きっと全国の川仲間と繋がって、楽しい交流会になると思います。明日は分科会が 4 つあります。4 つの分科会とも素晴らしいですが、命を繋ぐ行動と川の力、川の魅力を深く理解できると思います。

最後になりましたが、実行委員会の皆さま、スタッフの皆さま、協力していただいている皆様、心からお礼を申し上げます。みなさまありがとうございました。



■主催者挨拶 RAC 代表理事 久住 時男（新潟県見附市長）

ようこそ全国からお集まりいただきました、第 17 回全国大会 in 北九州、この小倉、紫川流域で開催されるにあたり一言ご挨拶を申し上げます。実行委員会を含めまして、開催されるにあたり、数々のご尽力を頂いたことにお礼を申し上げます。

昨年の 16 回は琵琶湖・淀川流域でありました。個人としても豊臣秀吉がその治水のすごさを実感させて頂いた大会でした。今回、北九州市、紫川流域は全国大会の 2 回目、15 年前に開催された。何人かはご参加されたということですが、やはり、15 年間のハードとソフトの先進的なこの地域のご努力について、私も早朝に体験したばかりですが、圧倒的に知恵が詰まっている。全国的にもまさに先進事例だと言えることなのだと思います。2 日間是非そのことを学ん帰りたいと思っています。

RAC は平成 9 年に河川法が改正になり、ご存知のように川に学ぶ社会を目指すという国の方針で、それを実践する、それを実行する組織として 2000 年に発足したものであります。川の指導者を育成するのが大きな使命があります。ここにおられる方もリーダー、インストラクター、トレーナの方もおられると思いますが、既に 5000 名を超える登録を頂いております。その方々各地域で活動するそのフィールドもつくって行かなければならないと思っていますところ。多くの皆さまが、全国にわたって河川に関わることを喜びとする方々が出てきていることは、国のこれからの大きな財産にしていかなければいけないと感じているところでございます。

最近では川の事故が多いということで、ライフジャケットの統一基準を国と一緒に作らせて頂いた。今までは非常にばらばらだったので、メーカーで RAC がつくった国の認定のマークを入れる形で進んでいる。また、河川教育、防災教育が全国でも注目されていますが、なかなか学校の先生だけでそれを実施するのが難しいということから、皆様のよう川に指導者が一緒に入ることによって実行される。各地での実例成功例が発表されている。

昨年、スポーツ庁が発足して 1 年でしたので、私がスポーツ推進計画の審議員でございましたので、川の活動や自然体験活動はスポーツの一つとしてその計画に書かせて頂いた。国がみなさまの力をとれるということも進めさせて頂いているところでございます。

この 2 日間は川の先進事例に学ぶとともに、ここにあつまる仲間が交流することも、全国大会の大切なものでございますので、大いに語らい情報交換して頂きたいと思います。先進事例をとりいれて、各地の活動に活かされることを祈念しております。

終わりに当大会の開催におかれまして、ご尽力いただきました NPO 法人川塾北九州の内村代表、並びに遠賀川河川事務所のみなさまにお礼を申し上げますと共に、今回この大会のためにわざわざお越しいただきました国土交通省水管理国土保全局の奥田調整官、そして何よりも地元北九州の北橋健治市長には心から感謝を申し上げて、お礼の言葉とさせていただきます。この 2 日間大いに楽しみましょう。ありがとうございます。

■祝 辞 奥田調整官（国土交通省水管理 国土保全局河川環境課河川環境保全調整官）

本日第 17 回川に学ぶ体験活動全国大会がここ北九州市紫川流域で開催されることに心からお喜び申し上げます。また日頃から国土交通省九州地方整備局が進めております、河川環境行政につきまして、皆様方から多望なご協力ご支援を頂き厚くお礼を申し上げます。

ご承知の通り、我が国は自然災害に対して非常に脆弱な国土状況にあります。今年も九州北部をはじめ全国各地で豪雨災害による甚大な被害が発生しております。自然災害から命を守るためには、洪水のみならず、自然や川そのものに関する知識と心構えを備えた個人を日常の中で育成することが必要不可欠であり、幼少期からの防災教育が重要となっております。また河川における水難事故も毎年多く発生しております。貴協議会におかれましては、今年もライフジャケット・キャンペーンという、ライフジャケット着用の普及イベントにご協力頂き、川での安全な活動の普及に努めていただいております。

川の安全な利用のためには、行政による情報提供に加えて、河川利用者自らが水難事故の危険性に関する知識を持ち、自らの安全は自らが守るという基本認識を持つことも重要です。そういう意味では RAC の活動はますます重要になってくるとおもっているところでございます。

国土交通省としましても引き続き、河川環境における情報提供、啓発活動に取り組んでまいりますので、皆様のおかれましても川の指導者育成の立場からご協力頂ければと考えているところでございます。また、川に学ぶ機会を通じて、河川の有する多様な価値を日常的に享受して、人々の意識に川への畏敬と感謝の思いが浸透しているという社会を目指し、皆様方の活動が主体的継続的な活動となることを期待しております。

最後になりましたが、大会の開催にご尽力いただきました、内村実行委員長をはじめとする実行委員の皆さま、並びに関係各位の皆さまに深く敬意を表するとともに、川での自然体験に関わる皆様が益々発展されますよう、また、本日も列席の皆様方のご健康とご活躍を心より祈念いたしまして、私の祝辞と代えさせていただきます。

■歓迎挨拶 北橋健治市長（北九州市長）

みなさんこんにちは。15 年ぶりになります、川を愛する皆さまがこの全国大会を北九州市で開催していただき誠に感激であります。ありがとうございます。内村実行委員長、RAC 代表の久住市長をはじめ皆様方のご尽力に深く深く感謝を申し上げたいと思います。

さて、川は一旦荒れると大変であります。この度の福岡県の九州北部豪雨で各地を視察に行き、本市からも専門の職員を復興事業に派遣しております。やはり河川の整備というのは普段からやっておかなければいけない。この北九州の場合はがけ崩れが 120 箇所でも人的被害はなかったのですが、河川というこの現実には生々しい災害を目の当たりにしたときに、ますます大事なテーマになるということと同じ県民の一人として感じているところであります。一日も早い復興を願い、私ども皆様方とともに精いっぱい応援をしたいと思っているところでございます。

この紫川ですが今日は小雨交じりであまり人は出ていませんが、1 年前は大変でございました。ここにレアもののラブラスがでたのです。そこからカモネギが出て大賑わいでした。あまり通じないかもしれませんが、あの時は過熱ブームでした。どこから若者がこの川の周りに集まるのかと思うくらいにぎわった。

諸先輩の決断によりまして、下水道を徹底して整備をする。そして、水上で暮らした方には住居を探すという色んな努力を重ねまして見事に美しい川に戻りました。昔の写真を見ますとお歯黒どぶのような状況であった訳であります。今フィリピンのマニラ市のある川もごみで大変汚れております。そこをフィリピンから委託を受けまして、北九州市の水質コンサルタントと私たち行政も一緒になりまして、いかに河川を綺麗にできるかというプロジェクトに入っているところであります。改めて、下水道の力は大きいなと思います。

そして、アユの放流という市民運動をずっと続けていくことが功を奏したと思います。アユは生き物ですから清流に棲みます。したがって川をきれいにしようとかゴミを入れないといふように皆がなります。また、あるところではホタルの幼虫を大事にしようとかほたる祭りをやる。川というフィールドを使ってアユとかホタルとか、そういうものを市民が、大人も子供も一緒になって取り組んできたことが大きかったと思います。今ではオープンカフェがあったり、あるいはカヌー、アクアスロンを通じて、さまざまなチャンスを通じて、身近に美しい川があることがどんなにすばらしい市民生活になるかということを、いろんな機会発信しているのであります。

今日お集まりの皆さまは川をフィールドに様々な試行錯誤と大きな成果を上げてこられたプロフェッショナルの方だと思います。それぞれの地域の成功モデルをもち寄りますと、本市おきましても大変有益な示唆を私どもが得ることができます。今後とも皆様方とのご縁を大切にさせていただきまして、日本中の河川がより美しく、国民からより愛される川になるように一緒に努力させて頂きたいと思っております。

この大会のご成功をお祈りしております。

○基調講演 13:30 ～ 14:30

【演 題】

『川の生き物の暮らしと洪水対策の調和を考えた川づくり』

【講 師】

安田 陽一 氏 日本大学工学博士

【講演概要】

川の環境を大事にする。その一方で洪水対策も大事。それぞれの立場があって調和したものを作るのは簡単なようで難しい。実際の活動を紹介しながら、川の理想の姿・川本来の姿をお話いただきました。

(→講演の詳細については、14 ページ 資料編①基調講演 講演録 参照)

【講師プロフィール】

1988 年日本大学大学院理工学研究科博士前期課程修了（土木工学専攻）、93 年博士（工学日本大学）取得。94 年日本大学理工学部土木学科専任講師、2000 年同助教授、06 年より現職。専門分野は水工水理学で、河川の水の流れについて、そこに生息する生き物の視点に立ち、その生態系保全のために物理環境はどうあるべきかを研究している。00 年「アメリカ土木学会（ASCE）水理学論文最高賞」、05・13 年「ASCE 水理学討議論文最高賞」を受賞しており、2 度の受賞は世界初。著書に『技術者のための魚道ガイドライン』（コロナ社）、共著に『水理学』（理工図書）、『写真で見る自然環境再生』（オーム社）など。



○活動事例報告 14:40 ～ 16:40

【RAC からの PR】

佐藤陽平（RAC 組織強化部会）

良い子は川で遊ばない人類 200 万年前から川で遊んできた。ここ 20～30 年でこのような状況。どちらが常識か。常識をつくれるのであれば常識をつくってしまえ。大人が体験をすればよいが、仕事で忙しい。だったら川で仕事をしてしまえ。それを VTR にした。

『川のカワカイギ』上映

【地元活動事例報告】

1. 団体名：北九州市立藤松小学校 活動名：「ESD の視点を取り入れた理科学習」
発表者：北九州市立藤松小学校 主幹教諭 / 教務主任 / 研究主任 林 謙吾 氏

防災教育の取組 ―防災の視点を取り入れた理科学習指導実践―

ユネスコスクールにも加盟。地震や火山の噴火、台風の迷走。異常気象の常態化。自然災害が多い国なのか。よく日本に住んでいるね。活断層の分布。活火山の分布。台風も日本めがけてやってきている。災害リスクを抱えた国。災害とともに、上手く付き合っている。

自分の命を守っていくには、マニュアル化された避難訓練の徹底に加えて、一人一人が自分で考えて行動することが重要と考えている。理科学習に防災の視点を取り入れた。5 年生の理科で流水の働き。地面を削る、土砂を運ぶ。堆積。

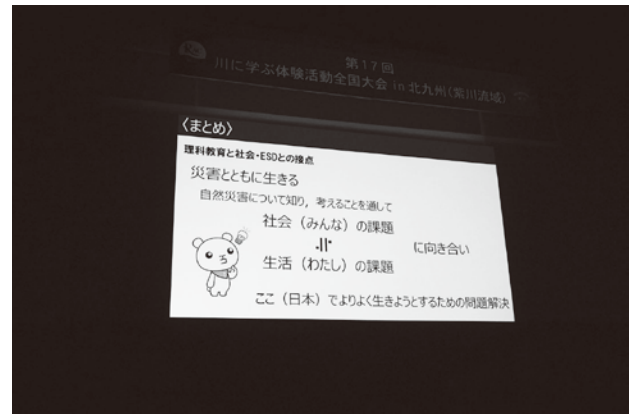
築山で川のモデル実験をやって観察する。それを通じて、スーパー堤防等があるが、災害発生の仕組みについては触れていない。その理解が不足していることから一大事に発展している。鬼怒川流域では雨が降ったところの下流側で水害が発生。自然災害に対しての過小評価。

水は集まってくる、高いところから低いところへ流れていく。流域が広い範囲から流れてくるために、莫大なエネルギー。観察から始めた。雨が降った時、雨どい、側溝から、近くの川へ流れる。ことを知らべた。雨は高いところから

低いところへ流れるのが観察から得られた。道路の斜面、傾きのあるところで、水がどのように動くのか観察。水はより低いところへ流れる。側溝に集まってより大きな流れへ。1 辺 1 メートルの升で、あつまった雨を計量して、運動場全体だったらどれくらいか図る。学校の周り、地域がどうなっているのか。裏山を模した砂山をつくって、雨を降らしたら、尾根筋を流れる、実際に土砂が押し流すことを観察。村中川へ流れていく。ここから流れる水の働きとはどういうものなのかを築山で実験。体験の終わりの方には、河川整備課の方にゲストティーチャーできてもらった。

門司大水害。砂防ダム等の観察。生活と関連付けながら理解できるように単元を構築した。ESD 教育の推進教育としても位置付けられている。世界の様々な課題は、世界は持続不可能にしてしまう。ESD はそれをなんとかしよう、考えていく教育。自然災害は諸問題の一つ。親和性が高い。

日本は災害のリスクが付きまとう。自然災害とともに生きること。日本においては社会の問題であり、私の問題である。日本の自然と上手に生きていくのは待ったなし。自然観を養い生き方を考える。理科、社会と ESD と接点。国土交通省、河川財団の支援を受けて実施。自然を正しく知って、恐れ適切に対応していく。



2. 団体名：福岡県立北九州高校 魚部 活動名：「魚部」 発表者：福岡県立北九州高校 2年生5名、1年生3名

魚以外にも色んな活動をしているので、その紹介。

調査採取活動。北九市内の河川や若松のひびき灘へ採取に年数十回採取に行く。ゲンゴロウやマムシなどの調査をして、ネイチャーセンターへ掲載。採取した生き物の一部を持ち帰り、飼育標本。

清掃活動を実施。ボランティア活動に参加。

展示イベント活動について。小倉八幡展で水槽展示を行った。テーマにあった展示を。生き物の特徴、クイズパネル等。少しでも喜んでもらえるように展示。

小学校との、魚や水生昆虫を採取。生き物を連れて行って、ふれあい体験会を行ったり、河川の生き物のお話し会を実施。学校内。中庭にはビオトープ。絶滅危惧種の保護活動。生き物の生息環境を整えたりしている。水槽は 80 個以上。文化祭では 50 個を展示。餌やり体験。

絶滅危惧種の生き物が身近な川に生息していたりするので、皆さんに興味を持ってもらう。

地域の方との交流を大切にして、かわわりを持ちたいと思う。



3. 団体名：リバークラブ紫川 活動名：「川に親しむ人づくり、つながりづくり」

発表者：「紫川水先案内人育成塾」卒業生 / RAC リーダー / 2級ビオトープ計画管理士 / 潜水士 中村 哲也氏

誕生と生い立ち。拠点とする場所はプレイベントの場所。熟練団体。

会のメイン場を語るには紫川の環境整備から。小倉都心部、紫川下流部で、マイタウンマイリバー整備事業。1990年から着手。100年に1度の大雨にも対応できるように整備。地元では28水害。他の地域でも大きな被害が発生。語りの会。大事業の為ネットで検索ください。

整備区域にはもともと10の橋。すべての橋をかけ替え。それぞれに、火、石、とかテーマがある。汽水域の中を見られる、カヌー艇庫。美しい街並みとして表彰。

建設局が水先案内養成を募集。定員は40名。カヌー、ヘルメット等を購入。川について総合的に知識をつけられるようになっている。市外の河川流域調査。16年間継続的に実施。行政主導で長いのは珍しい。よりよいまちづくりを市民の手でやって行こうというもの。

育成塾の卒業生でリバークラブ紫川を設立。毎月1回のペースで、ゴミ拾いなど。育成塾の卒業生が加入の条件。カヌーの技術だけでなく、レスキューの技術が必要だという認識。

紫川ではカヌーの体験が無料で出来る事業を市が開催。毎回200人程度が参加する。カヌー体験活動の実施が多くなってきた。これらのイベントにサポーターとして参加。紫川上流部。魚道近辺の川祭りの手伝いの様子。

稗田川でのカヌー講習、竹馬川での講習。止水域での講習。地域ごとにカヌー体験が広がってきている。堀川、江戸時代に掘られた運河。

四季を通じて川のゴミ拾いを行っている。自転車、冷蔵庫、テレビも。数年前。砂浜の整備も行っている。

会員は42名。RAC リーダーは16名。毎年1回安全講習。リバークラブ GOOD！



4. 団体名：NPO法人 水辺に遊ぶ会

活動名：「生きものの元気、子どもも元気、漁師さんも元気な中津の水環境を未来に」

発表者：NPO法人水辺に遊ぶ会 理事長 足利 由紀子氏

山国川でいかだをつくって川流れ。拠点を大分県中津市。干潟を中心に活動。県境。干潟3千ヘクタールで活動。

豊前市中富町で活動している。川でも遊んでいる。山国川の地図。大分県、福岡県を流れて海へ。オヤニラミ、アカザなどもガサガサでふつうにみられる。やまとしまどじょう、タナゴもふつうにみられる。シギチドリ類。アオギスの最後の生息地。ため池でべっこうトンボの観察。啓発活動、カブトガニ観察。調査研究、漂着物調査、郷土史聞き取り。学術レベルの活動をしようと。市民参加型の活動。海岸や、川でゴミ拾い。松林の保全。水産振興。ノリづくり、たこつぼ漁。土木行政と護岸。地域づくりの。念願の拠点をつくった。

中心に据えているのは山と川と海、水のつながりを心掛けている。川の豊か、森の豊かな為には森が豊かでないとだめ。水質観察。

4年生の子ども、8割、川の学習、海の学習を実施。川の生き物観察をして、自分達の地域を知る。川の上流・中流河口、プール、水道水の透視度。山国川の最上流の小学校。スジアオノリでデコ巻きずしをつくった。

山国川河川事務所、資料室を使わせて頂いて活動。川漁師と連携。潜ってつかまえる。リスクマネジメント。長谷川さんに講師で来てもらった。船が流されたときにどうするか。毎年はできないのが実情。これから大切になってくる。

100年後も豊かな水環境を子どもたちに残していきたい。



5. 団体名：ふくおかの川と水の会

活動名：「川に学ぶ」・「川にふれあう」・「森を育てる」などの活動

発表者：ふくおかの川と水の会理事 藤丸 正司氏

平成19年4月に発足。会員の年齢が高齢化。3つの部会で実施。森を育てる会に積極的に。県内756校に川や自然等が386校が校歌に河川や水。河川流域風土資産マップ。

紫川の概要から。平尾台、下流は北九州の都市機能が集約された土地。昭和30年代の高度成長期、一時期はBOD50、今は2~1。国土交通省のモデル事業。市街地整備を一体整備。市民のアイデアを具現化する。人口の滝。水上スペース、ワンドなど。水環境館も市民のアイデアを具現化したもの。

リバーアスロン大会。砂津川、生保元年に作られた地図。

このほか、江戸初期に、九州北部の主要な街道の拠点になっている。参勤交代では紫川が出発点になっている。シーボルトも来ている。伊能忠敬、九州の測量。出発点。利水。ダム。明治45年に完成。森鷗外がボランティアで……治水。昭和28年。梅雨期に集注している。川和を大切な財産にという願いをこめて資産マップを作った。

【全国活動事例報告】

6. 団体名：東予環境グループ 活動名：「誰もが参加できる川での活動の継続を目指して」

発表者：高須賀 友哉 氏・藤原 美紀 氏

東予環境グループは1990年に発足。自然観察会から始めた。出前講座46回。1年間に6回実施。いい川づくり。

親子川の流れ安全教室。平野に出ると水は地下に潜る。高校生が水難事故が相次いだ。それを防ぐために、3年前から実施。公民館で講義を受けてから、川へ。夏休みなるとガードレールからロープで降りる。蜷の巣。草むらには入らないで。ごみを捨てないでという看板はやめませんか。好評につき来年も定員一杯。

障がい者川安全活動。整備、公民館、携帯電話、水辺のすぐそばまで、多目的護岸。障がい者に合わせて手助けの方法が異なる。障がい者用の多目的トイレを準備。数が少なく確保が大変。料金も高い。赤ちゃん小さな子ども、高齢者にも便利。防災用で各県に1個整備を。今年は、障がい者支援者の皆さんに集まってもらって事前に研修。常設センターがあれば障がい者の活動も川に広がる。水難事故防止のための指導者の研修や、ボランティアの育成にも活用できる施設。障がい者と一緒になってフリーレントレインを全国に走らせること。

車いすが水辺に降りられない。碧眼透水。手すり痛んで危険。1780年から岩盤をほってつくられた。36.2メートルの水路として完成。滝や落差、甌穴も。深さ6メートル。川はみんなの共有財団。誰もが希望する場所で。誰もが年を取る。



7. 団体名：小川原湖自然学校 活動名：「マリモの棲む小川原湖で水遊びから環境教育へ」

発表者：RACトレーナー / CONEトレーナー / NEAL主任講師 / CONEリスクマネージャー /
プロジェクト・ワイルド / プロジェクト・WETファシリテーター / 河川協力団体 相馬 孝 氏

青森県にも自然が豊かなところですが、かつては公害問題で一度死にかけた。青森県で 1 番大きい湖。内水面の漁場、ワカサギ、天然ウナギも漁獲量日本一。マシジミも有名。高瀬川の一部。流程 64 キロ。太平洋戦争前後、鉱山があった。その排水が小川原湖に流れ込んで、漁獲量が激減した。農業にも影響。上北鉱山に対していい印象を持っていなかった。・終戦を機会にして、いろんな人が、なんとか小川原湖をよみがえらせたいと。東奥日報で取り上げられたことで、東奥賞を受賞した。

小川原湖楽校。年中遊んでいる。川。RAC は川団体なので川遊びがメイン。大坪川で飛び込みしたり川流れをしたりして遊んでいる。小さい子は飛び込めない。無理はしない。自分から気持ちが高まってくるのを待つ。

小川原湖、静水域。浅いところが発達している。水遊びに適している。急に深くなるところがない。高瀬川、海の満潮に合わせて海から上がってくることができる。カヌーの前をニホンカモシカが泳いで横切って行った。マテ漁の名残。東南アジア発症。そこから海まで下る。最近、鳥羽川流域でガサガサ。地元のことを地元の人がしる。生き物観察。3 年後にはゆうじこう。ガサガサをしてビオトープに移動している。

4、5、6 年生と通した活動をお願いしている。イバラトミオ。タガメはいない。日本でマリモといったら阿寒湖のマリモ。世界で丸いマリモは・・・最近小川原湖でも休憩のマリモが確認された。大きいものは 5 センチ以上。どういう風に丸くなるか不明。自然体験を年間を通じてやっているが、マリモの研究もやっていきたい。



8. 団体名：一般社団法人 地球の楽校 活動名：「釜石川遊びキャンプ」

発表者：一般社団法人地球の楽校代表理事 / 海の子森の子クラブ校長 / NEL 専任講師 / RAC トレーナー / RAC 安全講座講師 /
日本エコツーリズムセンター安全委員会委員 / ダイビング指導員 / 環境省環境カウンセラー 長谷川 孝一 氏

地域づくりに関わって、震災に関わった方が震災あってそこに駆けつけた。7 年前、3 月 11 日に大震災があった。隣りの湾の惨状。なかなかカメラを向けるきにならなかった。2 週間後に支援キャンプが始まるということで駆け付けた。体育館に 200~250 名が避難。保育園を借りて拠点。毎日御用聞きをして、支援物資を渡した。左上にポツンという。子どもを守ることに一生懸命だが、子どもが子どもらしく、教育ということには気が回っていなかった。

自然学校が 2 つ集合した。子どもの居場所、心のケア。楽しいこと、元気なことをやろうと。裏山で始めた。サバイバルコースの看板が落ちていた。木を倒してきて基地づくり。中にはお母さんが亡くなって、悲しい顔をしないが、わかっている。元気な子も一緒に活動。

釜石市内でなにかできることがないかと。いろんなイベントをし始めた。こいのぼりづくり、など、子どもらしく過ごせることをやった。お母さんが亡くなっている子供も元気に遊んでくれた。岩手県のネイチャーゲーム協会が駆けつけてくれた。素晴らしい川がたくさんあってそこで遊ぶこともした。

夏の日帰りキャンプ。「河童」の安全ビデオを見ていた。小さな源流で少し入る。水はものすごく冷たい。ウェットスーツはなかった。ライフジャケットは借りてきた。これが初めての活動。五郎兵衛淵。2014 年。4 年目。毎年中身を面白いものにしていこうと。川流をやって色んな取り組みをした。

清らかな水の農業用水。やっとうェットスーツを買った。滝をさかのぼるミニ冒険プログラム。子どもたちは興奮し

てチャレンジしていた。ゴールは人家の横。体験通して地域の理解を深めていく。体験活動をしながら装備を充実していった。右上の写真は、もののけ姫に出てくる泉のようなところ。水中眼鏡でヤマメイワナの観察を含めた川流れ。飛び込みにチャレンジ。実際は三陸人つなぎ自然学校が実施。地域の自然をだれにどのように伝えますかというのを書いている。

子ども事業の変遷。他地域・・・このままだと引っ越して地域から人がいなくなるという危機感。地域に対して愛着を持つということを努力してきた。居場所づくり、復興。子ども安全安心プロジェクト、専門家と組んで。

自分たちのお祭りを企画する。自分の愛する地域を自分たちが主体となっかまっ子祭り。仮設住宅の様子。お家が出来て減ってくる。居場所として遊びに来る。釜石と一緒に。

一番来てほしい子が来れない。「かまっこまつり」日帰りにしたら 85 名の参加があった。震災で家族が離れられないという実状があった。



○交流会 17:00 ～ 20:00

【会 場】

「紫川河川敷」

「北九州市立商工貿易会館」 北九州市小倉北区古船場町 1 番 35 号

紫川河川敷にて川を眺めながら皆さんと一緒に乾杯。その後、北九州市立貿易会館に移動し「川屋台交流会」と銘打って、楽しい時間を過ごしました。キッチンカー、振舞酒、バナナのたたき売りなど、盛りだくさんの交流会となりました。



2日目 10月15日（日） 午前の部 会場：紫川周辺

○分科会 9:00 ～ 11:30

【第1分科会】 ※(詳細については、16 ページ 議事録要旨 参照)

- テーマ 川と防災（熊本地震の報告も含む）
- ファシリテーター：佐藤 ともえ 氏（RAC）
- 話題提供者：中川 順野 氏（福岡県 県土整備部 河川課）
山下 吉弘 氏（NPO法人みずのとらベル隊）

【第2分科会】 ※(詳細については、24 ページ 議事録要旨 参照)

- テーマ E ボート語り部講座（川・人・文化の体験）
- ファシリテーター：佐藤 陽平 氏（RAC）
- 話題提供者：市民劇団（大樹）村本 政行 氏 ほか4名

【第3分科会】 ※(詳細については、27 ページ 議事録要旨 参照)

- テーマ 石組み魚道講座（実際に石組みを体験）
- ファシリテーター：橘 昌憲 氏（RAC）
- 話題提供者：安田 陽一 氏（日本大学 工学博士）

【第4分科会】 ※(詳細については、30 ページ 議事録要旨 参照)

- テーマ 川とまちづくり（新しいミズベリングの提案）
- ファシリテーター：泊 伸明 氏（NPO 法人 川塾北九州 理事）
- 話題提供者：田中 謙次 氏（日野川流域交流会）

2日目 10月15日（日） 午後の部 会場：北九州芸術劇場 中劇場

○分科会報告～パネルディスカッション～ 13:00 ～ 14:30

【コーディネーター】

平山 康弘 氏（NPO 法人 川に学ぶ体験活動協議会 理事）

【パネリスト】

佐藤 ともえ 氏（第一分科会）、山下 吉弘 氏（第一分科会）、佐藤 陽平 氏（第二分科会）、
安田 陽一 氏（第三分科会）、橘 昌憲 氏（第三分科会）、泊 伸明 氏（第四分科会）

各、分科会の報告を基に、コーディネーター平山氏の進行によりディスカッションを行った。

※(パネルディスカッションの詳細については、33 ページ 議事録要旨 参照)



コーディネーター 平山 康弘 氏



○閉会式 14:30 ～ 14:50

【閉会挨拶】

副実行委員長 西胤 正弘 氏

【次回開催地へのフラッグ引渡し】

茨城県取手市 小貝川



皆さん、また来年も笑顔でお会いしましょう！

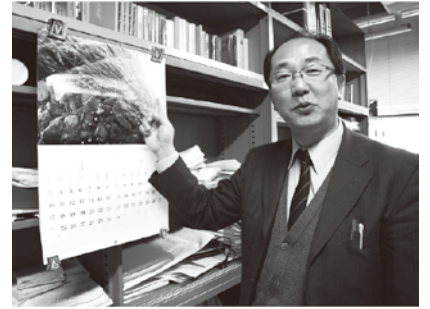
資料編①

基調講演 議事録 10月14日（土）13:30～14:30

演題：「川の生き物の暮らしと洪水対策の調和を考えた川づくり」
 講師：安田 陽一 氏（日本大学理工学部土木工学科環境水理研究室教授）

■講師プロフィール

1988 年日本大学大学院理工学研究科博士前期課程修了（土木工学専攻）、93 年博士（工学日本大学）取得。94 年日本大学理工学部土木学科専任講師、2000 年同助教授、06 年より現職。専門分野は水工水理学で、河川の水の流れについて、そこに生息する生き物の視点に立ち、その生態系保全のために物理環境はどうあるべきかを研究している。00 年「アメリカ土木学会（ASCE）水理学論文最高賞」、05・13 年「ASCE 水理学討議論文最高賞」を受賞しており、2 度の受賞は世界初。著書に『技術者のための魚道ガイドライン』（コロナ社）、共著に『水理学』（理工図書）、『写真で見る自然環境再生』（オーム社）など。



川的环境を大事にしよう、の一方で洪水対策も大事。それぞれの立場があって調和したものを作るのは簡単なようで難しい。川の理想の姿。川本来の姿とは？ 2 か所での活動紹介。

新幹線からみた広島から岡山に向かう風景→洪水になると川幅が広がることで流れが緩和される。しかし、川の両側に木があると流れが逃げられず、川本線に負担がかかる。

北海道の川の下流→植林によって、川の両サイドが木に覆われると、川の水の逃げ道がない、本来は大きな石が川底に堆積するはずが流れが厳しく、岩盤が露出してしまっている。川が水路になってしまうことで、増水時流れが集中し、下流域に負担がかかる。通り道を整備しすぎて、落差が1メートル以上ついてしまう。

川的环境としては難しい。山を守る目的で川の整備をしていると、川環境の全体が見えていない。自然の中に物を作るときは、山と川の専門家両方の連携が必要。

知床ではコンクリート護岸を崩し、自然の形態に戻したかのように見えるが、増水時はワイヤーで固定した石に負担がかかり、設置した石が移動してしまっている。九州でも川に負担がかかっているケースがある。岩盤に礫がたまっていない状態→生き物が住みにくい川になっている。

帯広の然別川の改修→両岸に木が生えてしまって、流れが変わってしまった。河床がかなり下がってしまった。25 メートルから 2 メートル川が下がった。ここまで変わってしまうと、自然はもとに戻らない。

普段は大きく蛇行した川。左右に砂州がある。そこには草が生えていない。頻繁に水が乗ると少しずつ流れが変わる。普段の通り道と、洪水の通り道は違う。大きな川だけでなく、川幅 3 メートルほどの川でも、川は蛇行して礫で構成された洲に植生。増水すると草が生えているところから洪水の時に水面がどこまで広がっているかわかる。水面幅を広げて流れる。洪水時、生き物は植生に逃げ込む。避難場所がつくられている。大規模な増水だと川幅全部を使って流れる。

東北の川。平瀬のところには砂利が相当たまる。浮石状態になっているので、水が浸透していく→サクラマスが生息できる淵になる。淵の深さは 1.5 メートルある。魚の住処。淵の形成があると魚が生活しやすい。

川の全体を工事してしまうと、流れが変わらないため水温が上がり魚の生息が厳しい。淵があると水底は温度を低く保てる。川底をフラットにしてしまうのは大変危険。

岩泉の渓流。大きな石の意後ろの対流。平常時と洪水時の流れは異なる。→石同士がどう組み合っているかで流れが決まる。自然と組み合わされる石。下流では洪水で被災してもサクラマスが上がってくる。川が流れるように流れている結果。窮屈にしてしまうと自由に流れたがる。そこを考えると減災には、生き物が生きる川になることではないか？

中小洪水時に川の底が大きく変わる。この時にいかに川底を守るかが大事。川の通り道を阻害しない。庭石とはことなる。石同士が組み合ってバランスをとっている。

石組が重要なポイントとなる。また植生も大事。

沖縄全体で見て、藻場が育成できる場所がどれだけあるか？→パイナップル畑の影響で、赤土が海に流出している。生体は大きな区切りで見なければいけない。

利根川水系 御巢鷹山の上野原。砂防施設がある下流側にも、生き物が避難できる場所がある。2面張りの川は生き物が生きるには厳しい環境と考えがちだが、川底さえしっかりしていれば問題ない。

知床半島の溪流。普段の流れと洪水時の流れが同じになることは大変危険。

岡山の川。八つ墓村のロケ地に使われる場所。植生を整備し、砂を減らした。アユの産卵場所を提供できるようになった。オイカワが日本一多い川と言われていたが、生まれてきても成長する場がないため捕食されてしまう。誕生できるが生育できない。増水時に水たまりのようなところで孵化すると、大きな魚が来られない環境のため、成長できる。

淡水化した現場で何が影響するか。海と川を行き来する生き物にとっては、厳しい環境。世代交代に寄与しない。沼エビは孵化からして3日で海に行かないといけない。エビの存在は大事→エビが少ないと魚も少ない。

どうすればみんなが暮らせるか？食物連鎖にも大きく影響する。生き物が生き延びられる方法はなにか？勾配を変える。入れ方を間違えると効果がない。

魚が行き来できる環境を作っている。コンクリートを使っていない。段差からプールをなくしてしまうと、崩れてしまう→踏ん張るはずの石の根元が削られ、崩れてしまう。

堰堤が上流に5基。勾配がきつい。川底がほじくり返され、川に道をつくる。石組を利用。溪流で手を出すと、下流でどれだけ大変なことになるか。

川の変えることで、生息密度0→1へ変化した。これは小さな変化に見えるかもしれないが、大変大きな変化。機能していない魚道→手前に魚道を作ろうとしている。石組。局面に沿って流れを作る。

規模を大きくして、まとまった出水の時でも安定するかどうか確認している。

石組みの現場は結構大変。工事関係者には自分の身分を明かさずに石組作業に参加した。小さな石から砂利をかけて水締を行い、2日間13時間で組んだ。4日後に雨が降り土嚢を越流してきた。石組は壊れなかったが、流れが集中したところは石が飛んでしまった。土嚢もいくつか流された。石組の下流側の土嚢が残ったのは、石組みのおかげで川の流れが緩和されたため。

魚が認識してくれない魚道。40センチ前後の玉石で、水の流れを止めず4時間で組んだ。石と石の間隙は魚の逃げ道。去年の11月に組んだものだが、現在もこのまま。石の組み合わせをきちんとしているから残れる。日本全国でできる。

京都の鴨川でおこなった。漁協さんと組んでおこなった。今年の増水時、ナマズが泳いでいる川にサギが来た。ナマズが遡上している。→ほかの魚も上がれるはず。石組みをすることで様々な可能性が生まれる。

石組みなら短期間で勝負できる。全国各地で行われている。これからの川で活かせる技術として重要。



分科会 議事録要旨 10月15日（日）9:00～11:30

第1分科会「川と防災（熊本地震の報告も含む）」

ファシリテーター：佐藤 ともえ 氏（RAC）

○話題提供 山下 吉弘 氏（NPO法人みずのとらベル隊）

水のトラベル隊は緑川流域の嘉瀬川で活動している。普段、自然体験活動を通じて、子供さんたちに自然のこと、環境のことに気づいて頂こうと活動している。夏は、なまずの学校というところでカヌーの体験学習、そこでカヌー体験をしながら、外来種、生物のことを学んでいる。冬は、季節を利用して炭焼き体験、竹林から竹をとって、その竹を焼いて炭をつくって、ピザをつくって、という学習をしている。そして実際に竹炭をつくって川に沈めて浄化作用があることも学習している。鹿島町というところから2泊3日で、有明海までのカヌーでキャンプをしながら、約23キロを下っている。

お手元の資料。今日ご参加いただいている方は、東京、千葉、茨城。九州前県の資料をつくりたかったが地元福岡の地震の歴史、水害の歴史がある。熊本の過去の地震として島原の地震を認識していたが、それ以前の地震について認識はなかった。今回被災して初めて、地震雷火事親父、この順番の意味が初めて分かった。親父は大したことがない。火事は・・・雷はこちらが注意していてもやられてしまう。地震は避けられない。どれだけの人が南海トラフの備えが来ているのか。

自分体験したこと。セルフレスキューファースト、自助、互助、共助、公序。余震ではそうではなかったが、本震でこうなった。3月に引っ越して、よかったねといっていて、4月に地震。震度7は動けない、部屋の中にいる母を玄関先につれてくるのに3、4人手がかかる。

本当に大変な状況でした。目の前の駐車場に避難して、電気はすぐに復旧して。避難所にすぐに入られた方はこういう対応もできなかった。食器は飛び出します。余震があるので片付けもできない。雨が浸みてきて生活物資がつかえなくなる。

阪神淡路のときにはテレビで見えていた。大変だという思いはあった。被災してみるまで被災した人の気持ちを本当に理解できていなかった。

私はブッシュクラフトという野遊びを勉強して、キャンプ場の管理運営をしていて、自宅の物干し台とブルーシートとひもで避難することが出来た。

車いすの母がいると避難所に行くことを遠慮する。車中泊をするとそこでつらい思いをする。いちばん困ったのはトイレ、本震で塗り壁が落ちて使えない。余震の時から使えなくなって本当に困った。近くのガソリンスタンドが井戸水があったので、解放してくれた。

益城町の土地のことを説明した動画。固い地盤と軟らかい地盤。浅いと揺れがあまり伝わらない。やわらかすぎても増幅されずに吸収されてゆれが少なくなる。ものすごく揺れが伝わる場所がある。新しい活断層がみついている。九州全域でそう。

これからゲームをしたい。

4つの設問について○か×かを選択して、それぞれについて意見交換を行う（5分程度）。

[設問]

設問1 避難場所

設問2 避難行動 ・ つなみでんでんこ

設問3 持ち出し品について

・ 南海トラフに気を付けてください。

避難袋は、押し入れにいられてはだめ。発災後は玄関おかないとだめ。

止血できサランラップがあるか、個々人の状況に応じて、避難袋。通勤、通学時、家族は持っているか、それらを想定しておくのが本当の備えになるのではないか。

熊本地震の時には全国のみなさまから支援を頂いた。これを全国にひろめることで恩返しができればと思っている。

□佐藤ともえ

いまのところ知っている人同士の話し。後でシャッフルしたい。

○話題提供 中川 順野 氏（福岡県県土整備部河川課）

福岡県庁河川課係長。4 月に異動し、7 月に被災。大変な時期に来た。7 月の九州北部豪雨について簡単に説明。筑豊地方。筑後川の支線にあたる。赤谷川。被災前の航空写真。緑の山林が非常に多い。平野部は田んぼ畑、筑後川沿いは家屋が密集している。のどかな田園地帯。

降雨の状況。今回の雨は朝倉市。真っ赤な状態。2 時間に 774 ミリ観測した。雨の状況、平成 24 年にも比較的あめがった。酷かったのは八女市。八女川という 1 級河川、堤防決壊して被害が大きかった。今回の朝倉地方の雨。地域は違うが、累計雨量が 600 ミリ。時間最大雨量は 116 ミリ。累計して 800 ミリだったが、9 時間で 900 ミリ。5 年前と比べて 1.5 倍の雨量を観測。今回の雨については短時間で記録的な豪雨。原因とされているのは線状降水帯。積乱雲が次々に発生。現在の被害状況。福岡は死者 34 名。不明者 4 名。まだ 100 名以上の人が避難所生活。被害額、公共の施設で、2000 億円。正確に把握しきれていない。

白木谷川の写真。流木の状態。普通は川幅数メートルのところ。道一杯で流れている。堤防が決壊して街中が広範囲で浸水している。記録的豪雨によって、山腹が崩壊、土砂が川に流れている。赤い範囲で示しているエリア。赤谷川付近がひどかった。堤防決壊などによって被害が発生している。流木が引っ掛かっている状況。左上が流木が流れているものをダムで貯めた。寺内ダムで流木を補足した。

赤谷川流域の被災後の状況。水色が被災前の河川。茶色い部分が土砂、流木が流れ込んで茶色くなっている状況。違うところを流れている。上から流れてきた流木が端に引っかかって、あふれた。道路側橋が流された。落ちそうなところの体育館の様子。

東峰川、橋に流木が引っ掛かっている状況。砂防ダム。寺内ダムで流木が補足されている状況。上から流れてきて流木が止まっている。上流側の様子。砂防ダムの上流側で流木がたまっている状況。ダムで捕捉されていなければ、さらに下流に流木が流れ出していた。

赤谷川流域、山腹崩壊があって、土砂が大量に流出。県では厳しいので、流木、土砂の撤去を国にお願いしているところ。7 月中旬に依頼して、9 月末に完了。県で取り組んでいる復旧。橋が流されたところ。土嚢を積んで応急復旧。流を確保した。

今回の被災の特徴、豪雨によって流木と土砂が大量に流出した。それが被害を大きくした。検討委員会を立ち上げているが、被災状況、流木の発生状況、今後被害を発生させないためにどうすればよいか。ソフト対策の取組。土砂と流木で河川が埋まっている状況。応急的な対応として、監視カメラ。静止画。9 月 22 日から公開。14 か所のうち、次回 7 か所更改予定。

防災無線をつけていたが、豪雨で不具合が生じた。発信機が故障、ケーブルが断線。大雨のせいで放送が聞こえない。情報連絡の多重化、スマートフォン、メールで送る手段をとると聞いています。

7 月 4 日からの運用、全国 2 万河川に、洪水状況の情報提供を開始。右側の写真、朝倉地域、6 時間後までの予測を

島根県で警報が出ていた。豪雨が来るとは思っていなかった。活用しておけばよかったという反省もある。風水害から自らの安全を守る。防災情報に強くなる。雨が弱い、下に行くにつれて強くなる。一番右かわの市町村情報は、避難指示等。住民は真ん中。危険を感じたら避難行動に移してほしいと書いている。

防災情報をうまく活用しましょう。平常時、雨の弱い時、県の防災に関するホームページ、情報を活用しましょう。避難情報、避難経路。地デジでも雨の状況を手に入る。自分の命家族の避難に役立てる。

行政もできることは限られている。100%は無理。自分の命は自分で守る。最近の雨は局地化激甚化する傾向になる。洪水は必ず発生する意識に転換している。そういう意識をもって、自分の命は自分で守るという意識をもっていたらいいと思っている。自助、互助、公助。相互に連携してやっていけたらと思う。

□佐藤ともえ ワールドカフェ

□丸山　今回は流木が多い。風だけでも倒木する。杉林は根が張らない。福岡県の方も説明された、国土交通省の河川部長も協力したいと話していた。

☐佐藤ともえ

- ・避難行動、備品について RAC 指導者としてどのようにすべきか。
- ・ワールドカフェについて。自由な発想で、ぐるぐるまわる。話しやすさ、雰囲気を見出す。ひとりの人だけが話すのではなく、人と人のつながり。人話をよく聞きましょう。出されたテーマに集中しましょう。4 名 1 組のグループ。人の発言を否定することなく、受け止めましょう。時間の合図があったら、1 名を残して他のテーブルに移動。

Q.「避難行動、備品」について自助を促すことについて、RACとしてどうしたらよいか？

- ・ RAC 指導者として自助は当然。
- ・ トーキング・オブジェクション。
- ・ 目線は同じレベルで、RAC がいるのであれば、地域に住んでいるというコミュニティつくる。
- ・ 信頼されるような教育をしなければならない。大川小学校の先生は訴えられた。勉強するべき。

□久住時男（24 箇条）ダウンロード可

平成29年4月 災害時にトップがなすべきこと協働策定会議

災害時にトップがなすべきこと

我が国は災害列島と呼ばれ、毎年のようにどこかで大災害が発生している。しかし、多くの場合、当該都道府県では「た
まに」、当該市 しかし、多くの場合、当該都道府県では「たまに」、当該市 しかし、多くの場合、当該都道府県では「たまに」、
当該市区町村では「ごく 町村では「ごくまれに」被災を経験するというのが実態である。いわんや、4 年任期の首長にとっ
ては、ほとんどの場合、「職務上初めて」の経験である。

市区町村長は、多くの場合、災害に関する危機管理の訓練を受けておらず 市区町村長は、多くの場合、災害に関する危機管理の訓練を受けておらず 市区町村長は、多くの場合、災害に関する危機管理の訓練を受けておらず、しかも、わが国には災害の危機管理に関し 危機管理に関し 危機管理に関して市区町村長を体系的に訓練する仕 町村長を体系的に訓練する仕組みは整っていない。

その結果、毎年のように失敗と批判が繰り返されている。その結果、毎年のように失敗と批判が繰り返されている。

それでもなお、それでもなお、それでもなお、「危機管理における意思決定は現場に最も近い市 危機管理における意思決定は現場に最も近い市 危機管理における意思決定は現場に最も近い市区町村長がその責任を負うほかはない」というのが私たちの信念である。その責任を負うほかはない」というのが私たちの信念である。というのが私たちの信念である。自分たちの地域 自分たちの地域への責任を、私たちは への責任を、私たちは放棄するわけにはいかない。放棄するわけにはいかない。

この「災害時にトップがなすべきこと」の「災害時にトップがなすべきこと」の「災害時にトップがなすべきこと」は、大水害を経験した首長の集まりは、大水害を経験した首長の集まりである「水害サミット」で策定した「災害時にトップがなすべきこと」に、東 である「水害サミット」で策定した「災害時にトップがなすべきこと」に、東日本大震災や熊本地震等の大地震を経験した首長の意見を新たに加え、風水害、日本大震災や熊本地震等の大地震を経験した首長の意見を新たに加え、風水害、地震・津波全般にわたって最低限トップが知っておくべき事項として 地震・津波全般にわたって最低限トップが知っておくべき事項として取りまとめたメッセージである。

ここには、私たち ここには、私たち ここには、私たち自身が失敗し、もがき苦しみながら重ねてきた ながら重ねてきた ながら重ねてきた経験と教訓が込められている。が込められている。いざというとき、全国の市区町村長の方々に、せめて いざというとき、全国の市区町村長の方々に、せめて いざというとき、全国の市区町村長の方々に、せめてこの「災害時にトップがなすべきこと」があ がなすべきこと」があったことを思い出し、参照していただければ幸いである。ことを思い出し、参照していただければ幸いである。

このメッセージが、大災害に このメッセージが、大災害に このメッセージが、大災害に関するトップの意思決定の一助となり、被害のトップの意思決定の一助となり、被害の軽減につながることを心から祈念し、全国 がることを心から祈念し、全国 がることを心から祈念し、全国に発信する。

1 平成29年4月10日 平成29年4月10日

災害時にトップがなすべきこと協働策定会議 災害時にトップがなすべきこと協働策定会議 災害時にトップがなすべきこと協働策定会議

岩手県陸前高田市市長 岩手県陸前高田市市長 戸羽 太

岩手県釜石市長 岩手県釜石市長 野田 武則

宮城県石巻市長 宮城県石巻市長 亀山 紘

宮城県南三陸町長 宮城県南三陸町長 佐藤 仁

茨城県稲敷市長 茨城県稲敷市長 田口 久克

千葉県香取市長 千葉県香取市長 宇井 成一

新潟県三条市長 新潟県三条市長 國定 勇人

新潟県見附市長 新潟県見附市長 久住 時男

長野県白馬村長 長野県白馬村長 下川 正剛

兵庫県豊岡市長 兵庫県豊岡市長 中貝 宗治

熊本県熊本市市長 熊本県熊本市市長 大西 一史

熊本県嘉島町長 荒木 泰臣

熊本県甲佐町長 奥名 克美

熊本県益城町長 西村 博則

熊本県西原村長 日置 和彦

【 I 平時の備え 】

1 迫りくる自然災害の危機に対処し、被災後は人々の暮らしの復旧・復興にあたる責任は、法的にも実態的にも、第一義的に市区町村長に負わされている。非難も、市区町村長に集中する。トップは、その覚悟を持ち、自らを磨かなければならない。

2 自然の脅威が目前に迫ったときには、勝負の大半がついている。大規模災害発生時の意思決定の困難さは、想像を絶する。平時の訓練と備えがなければ、危機への対処はほとんど失敗する。被災経験がない首長は、自然の脅威を甘く、組織と人間の対応能力を過大に想定しがちである。心のどこかで、自分のまちには災いは来ないと思い込んでいる。それは、油断である。

3 市区町村長の責任は重いが、危機への対応能力は限られている。他方で、市区町村長の意思決定を体系的・専門的に支援する仕組みは、整っていない。せめて自衛隊、国土交通省テックフォース、気象台等、他の機関がどのような支援能力を持っているか、事前に調べておくこと。連携の訓練等を通じて、遠慮なく「助けてほしい」と言える関係を築いておくこと。

4 日頃から住民と対話し、危機に際して行なう意思決定について、あらかじめ伝え、理解を得ておくこと。このプロセスがあると、いざというときの躊躇が和らぐ。例えば・・・

・避難勧告、避難指示（緊急）は、真夜中であっても、たとえ空振りになっても、人命第一の観点から躊躇なく行うということ。

・堤防の決壊という最悪の事態を防ぐため、排水機を停止することがあるということ。停止すると街は水浸しになるが、人命最優先の観点から、躊躇なく行うということ。

5 公務員といえども人であり、家族がいる。多数の職員が犠牲になると、復旧・復興が大幅に遅れる。職員も一時撤退させることがあるということ。（住民への強い責任感から、職員は危険が迫ってもなかなか逃げようとしない。職員にも自らの命を守ることを最優先するよう徹底しておくこと。）

・大地震の初動時は、消防は全組織力をあげて消火活動を行うということ。（倒壊家屋からの救出より消火を優先するということ。）

6 行政にも限界があることを日頃から率直に住民に伝え、自らの命は自らの判断で自ら守る覚悟を求めておくこと。

個々人の置かれた状況は千差万別で、行政は対応しきれない。行政はできるだけ正確な情報を収集し、適切な方法で伝えなければならないが、最後は本人の判断である。

7 災害でトップが命を失うこともありうる。トップ不在は、機能不全に陥る。必ず代行順位を決めておくこと。

8 日頃、積極的な被災地支援を行うこと。派遣職員の被災地での経験は、災害対応のノウハウにつながる。

【Ⅱ 直面する危機への対応 直面する危機への対応 直面する危機への対応】

1 判断の遅れは命取りになる。特に、初動の遅れは決定的である。何よりもまず、トップとして判断を早くすること。

人の常として、事態を甘く見たいという心理が働き、判断が遅れがちになる。広範囲に災害が予測される場合、トップは、災害対策本部（庁舎）から離れてはならない。トップの不在は、判断の遅れにつながる。ただし、現場を見ないと判断がしにくいことも事実。映像や画像等、現場からリアルな情報が災害対策本部に届けられる仕組みをあらかじめ作っておくことが肝要。被災者の激励は、落ち着いた段階で行うことでよい。

2 「命を守る」ということを最優先し、避難勧告等を躊躇してはならない。

命が最優先。空振りを恐れてはならない。深夜暴風雨の中で避難勧告等を出すべきか悩みが深い、危険が迫っていることを住民に伝えなければならない。

行政は、個々に応じた避難情報の提供は不可能であることを率直に伝え、「いつ、どこへ逃げるか」を日頃から考えておくよう住民に求めること。もちろん行政は、情報を的確に把握し、適切なタイミングと方法で伝えるため努力を行わなければならない。

3 人は逃げないものであることを知っておくこと。

人間には、自分に迫りくる危険を過小に評価して心の平穏を保とうとする、「正常化の偏見」と呼ばれる強い心の働きがある。災害の実態においても、心理学の実験においても、人は逃げ遅れている。

避難勧告のタイミングはもちろん重要だが、危険情報を随時流し、緊迫感をもった言葉で語る等、逃げない傾向を持つ人を逃げる気にさせる技を身につけることはもっと重要である。

4 住民やマスコミからの電話が殺到する。コールセンター等を設け対応すること。

被災前後は、電話が殺到し災害対策本部が機能不全に陥る。それぞれの部署が銘々に電話対応するのではなく、専門のコールセンターを設けるなどして、職員が災害対応に集中できる環境を整えること。

5 とにかく記録を残すこと。

様々な記録は、必ずその後の災害対応に生きるもので、被害状況、対応状況、現場写真等、部署ごとに詳細な記録を取るよう命じておくこと。

【Ⅲ 救援・復旧・復興への対応】救援・復旧・復興への対応】救援・復旧・復興への対応】

1 トップはマスコミ等を通じてできる限り住民の前に姿を見せ、「市役所（区役所・町村役場）も全力をあげている」ことを伝え、被災者を励ますこと。住民は、トップを見ている。発する言葉や立ち居振る舞いについて、十分意識すること。

2 ボランティアセンターをすぐに立ち上げること。ボランティアは単なる労働力ではない。ボランティアが入ってくことで、被災者も勇気づけられ、被災地が明るくなる。ボランティアセンターと行政をつなぐ職員を配置すること。（ただし、地震の場合で余震が危惧される時は、二次災害の防止に配慮して開設すること。）必ずボランティアの助けが必要になる。ニーズ調査を待っていると時間をとられ、ボランティアの受入れが遅れる。まず発災直後にボランティアセンター

を立ち上げ、ホームページ等で広く紹介すべきである。

3 職員には、職員しかできないことを優先させること。

職員の数は限られている。他からの応援があっても、職員がしっかりと受援体制を取ることができないと、効率的に機能しない。避難所運営等、職員でなくてもできることは自主防災組織等に任せ、被災家屋調査や応急仮設住宅の建設等、職員には職員にしかできないことを優先させるべきである。平時にこの仕組みを作っておくことが、復旧・復興の迅速化につながる。

4 住民の苦しみや悲しみを理解し、トップはよく理解していることを伝えること。苦しみと悲しみの共有は被災者の心を慰めるとともに、連帯感を強め、復旧・復興のばねになる。

例えば、災害廃棄物も元々のごみではない。それらが住民の大切な財産であったことや、沢山の思い出の詰まったものであったことに思いを寄せること。

5 記者会見を毎日定時に行い、情報を出し続けること。「逃げるな、隠すな、嘘つくな」が危機管理の鉄則。マスコミは時として厄介であるし、仕事の邪魔になることもあるが、その向こうに市民や心配している人々がいる。明るいニュースは、住民を勇気づける。

全国への情報発信は、マスコミを通じて行われていることを忘れてはならない。被災住民にとっても重要な情報源である。災害後、被災住民にとって一番つらいのは世間から忘れ去られることである。混乱する職員にとっても、重要な情報源となる。良いことも悪いことも報道されるが、たくさん情報発信のあった被災地に支援が集まる傾向がある。

6 大量のがれき、ごみが出てくる。広い仮置き場をすぐに手配すること。畳、家電製品、タイヤ等、市民に極力分別を求めること。事後の処理が早く済む。

事態が少し落ち着くと、ごみとの闘いが待っている。地元のごみ処理施設だけで処理することは不可能だが、災害廃棄物の分別ができていないと、他の自治体は受入れてくれない。住民からは苦情が出るが、極力住民に排出時の分別を求めること。できない場合、広めの仮置き場を設置し、持ち込む段階で「可燃ごみ」「不燃ごみ」「畳」「家電製品」「木質ごみ」等に分別して集積すると、その後の処理時間と経費を大幅に削減することができる。

7 庁舎内に「ワンストップ窓口」を設け、被災者の負担を軽減すること。

被災者には高齢者や障がい者も多い。可能な限り窓口を集約し、一度の来訪で目的が達成できるよう配慮することが必要である。

8 住民を救うために必要なことは、迷わず、果敢に実行すべきである。とりわけ災害発生直後は、大混乱の中で時間との勝負である。職員に対して「お金のことは心配するな。市長（区町村長）が何とかする」、「やるべきことはすべてやれ。責任は自分がとる」と見えを切ることも必要。混乱の中でもスピーディな判断と行動は不可欠。トップは、全ての責任を取る覚悟で、職員を信じて任せる勇気が必要である。大見えを切ると職員は奮い立つ。

9 忙しくても視察を嫌がらずに受け入れること。現場を見た人たちは、必ず味方になってくれる。

10 応援・救援に来てくれた人々へ感謝の言葉を伝え続けること。職員も被災者である。職員とその家族への感謝も伝えること。

11 職員を意識的に休ませること。

災害対応は長期戦になる。休みや休憩を職員任せにすると、職員は他市区町村の応援者やボランティアに気兼ねし、休むことができません疲弊する。自衛隊は不眠不休だが、自衛隊員は交代で休んでいる。組織的に職員を休ませること。

12 災害の態様は千差万別であり、実態に合わない制度や運用に山ほどぶつかる。他の被災地トップと連携し、視察に来る政府高官や政治家に訴え、マスコミを通じて世論に訴えて、強い意志で制度・運用の変更や新制度の創設を促すこと。

例えば、東日本大震災当時の被災者生活再建支援法では、液状化による被害に対応できず、被害認定ができなかった。そのため、茨城県及び千葉県の被災自治体がまとまって、罹災証明の液状化被害に対する被害認定について国に要望し、新基準が創設された。被災地の実情と窮状を一番知っているのは、被災自治体である。制度が無いからと諦めてはならない。被災自治体が諦めれば、そこで終わってしまう。

大規模災害の答申を 7 名でつくっている。今回ののは農水。流木の問題。



第 2 分科会「E ボート語り部講座（川・人・文化の体験）」

ファシリテーター：佐藤 陽平 氏（RAC）

紫川下流で 1 時間余りの E ボートによる、語り部体験をした。

その内容は、語り部さんにより異なりますが概ねこのような内容でした。

○語り部

皆様 こんにちは ようこそ 北九州市にお出で下さしまして 有難うございます。

わたくしは この舟の 語り部の村本です。 よろしくお願い申し上げます。

それでは、この紫川の由来から語ることにいたします。川の名前はいろいろあるが、色の付いた川で、白やら黒やらは沢山あるが、紫などという美しい色の川は、日本国中探しても、なかなか、ありません。紫川の名前の由来には諸説ありますが、私が思うには、その昔、紫川の川岸には藤の花がたくさん咲いていて、その紫色が川面にうつり、とても美しいながめだったため、いつしか人々は紫川というようになったと思います。ここまでが、紫川の由来でござい。

ここからは、小倉の話でござい。

小倉は、1600 年関ヶ原の合戦で勝った東軍を味方した、細川氏がその功績をかわれ、初代の小倉藩主となったのであります。

細川公は剣術を奨励していたため、剣術指南探していたところ、豊前の添田に佐々木小次郎が居たのである。（諸説ある、福井生まれが一般的）

小次郎を呼び寄せ、紫川の左岸の原町に住まわせて、藩士に剣術を教えることになったのでござい。

1612 年に武蔵が細川家家臣の長岡氏を頼って小倉に現れ、武蔵は当地で指南している佐々木小次郎と兵法較べをしてみたいと願い出て、巖流島で決闘したのは皆さんの知るところでござい。

ということは、武蔵はこの川の右岸のこのあたりに住んでいたのかもしれませんが。400 年前、紫川を挟んで、武蔵と小次郎が睨み合っていた 場所に皆さんは来ているのでござい。

想像してみてください、昔の文献には、この付近は青のり漁が盛んに行われ、鵜飼も行われ、小倉の城下の食料を担う川だったのです。

戦後の高度成長時期には七色の川と言われ、ゴミとヘドロで覆われ、皆が川から背を向けた、黒い川の時代があるのです。昭和 38 年、こんな汚れた汚い川は黒川にするのが、適切だと言われ、怒った市民は美しい名前の川を残すべきだと立ち上がったのでござい。

～途中省略～

最後に川は人間の内面、心性に影響を与えて来ました。

川が人間にとってなくてはならない恩恵をもたらす一方。時には大規模な氾濫を起し、人間の生存を脅かす存在でもあります。しかし、川は自然環境のもっとも豊かな一部であり、多様な生態系も見られます。

とくに、人間にとって、貴重な自然体験・交流の場所であったのです。

歴史・文化・人が複合的に交わり、川を中心に街が出来てきたのです。

川は住民の心を映す鏡ともいわれます。

紫川がドブ川であった頃は、建物は背を向け、住民も川を向いていませんでした。

今から、40 年前。美しい川を取り戻そうと立ち上がった人々が、今の紫川を蘇らせたのでござい。

拍手！拍手！



○水環境館でのまとめ

紫川の謂れや、橋の物語、小倉の町の歴史を、E ボートを使って体験できたことは、素晴らしかった、こればビジネスにもなると思いました。今まで、気にしなかった護岸に使用している自然石を使っている、どうしてここまで金を使って出来たのか、不思議でたまらない。それも、歴史だけでなく、河川的环境まで考えて、川を造ることに感心した。北九州市が、何でもここまでやるのか。そのエネルギーは何処から来ているのか不思議です。その訳は、40年前、北九州は公害の町でドブ川で汚いと罵られていた。それを、払拭するため市民と行政が何とかせんといかんと立ち上がったからでしょう。でも、誰が引っ張って、誰がここまで、したのか、素晴らしい。

いろんな事業が、いろいろ絡み合って、みんなの意見を聞きながらここまで出来たことを知って。紫川が大好きになった。この話を聞くまでは、川も街も橋のことも知らなかった。この話は、語り継がないといけない。

また、紫川を自慢したくなった。そして、いろんな可能性が出てきたと思います。日常的にも、イベント的にもお金が取れる事業になると思います。

また、今回の語り部さんが参考になりました。ラーニングピラミッドの典型です。
脳の記憶に残る体験の定着率は75%、教える場合は90%です。

今回の語り部さんは、今回の仕事を受けて、火がついて、勉強して伝えることが出来るようになったと思います。このように、語り部体験はRACの今後の活動に使えます。



第3分科会「石組み魚道講座（紫川中流伊崎堰にて）」

ファシリテーター：橘 昌憲 氏（RAC）

○話題提供 安田 陽一 氏（日本大学 工学博士）

○案内役：北九州市役所水環境課（内田氏）

いま紹介に預りました。北九州市役所水環境課の内田といいます。よろしくお願いします。ここの状況を簡単に説明すると、古くからの堰が向こうにあります。三角形になっているところです。あの辺にが魚道があるんですけど、魚道の奥が堰になっています。農業用の堰になっていまして固定堰です。右岸の一部が転倒堰になってます。どうしてもここをなくす訳にはいかないという状況です。ここは、二級河川の県管理の河川ですが、承認を得て北九州市の施工区間になっています。

市の施工区間の改修を早く進めていきたいところですが、下流が福岡県が施工がするところなんですけど、いろんな問題で進捗が図られてない状態なので、福岡県の作業待ちの状態になっていますので、ここの魚道も改修できないという状況です。

それで、魚道の改修事態は、10年、数十年先ぐらいに、なるのかなという見込みです。いまのところは、ここの抜本的な改修は10年先になるので、簡易的に生態系を生かすというところで、なんとか魚道復活できないかというところで、安田先生の方に相談をさせていただきました。下流側でも、実は安田先生にちょっと魚道の改修してもらっているところがあるんですけども、ここはここのやり方で、また、昨日の講演聞かれた方いらっしゃると思うんですけど、昨日の基調講演の中で、模型実験の話があったと思うんですけど、その設置を行うにあたって、模型実験までやっていただいて、実際の設置にも携わっていただいているという状況です。そういうことでも、今の堰を改修をまだ、先延ばししつつ生態系を生かすための魚道も設置することにしました。

今回の石組み魚道について詳しく安田先生から、話はあると思うんですけど、完全に空積みです。まったくコンクリートも使っていない状態で、設置していただいております。たぶん、車内で、渡したペーパーの中に、写真を何枚か貼ったぶんがでてくると思うんですけどその中に、出水の状況がでてます。大雨降って水嵩が上がって、さらに水量があってもまったく今の状況で崩れてないというところなので、やっぱり、安田先生の石の積み方やっぱ、さすがだなというところがあるなと思っております。簡単にここの魚道の説明をさせていただきました。向こうの魚道を、向こう岸からたぶんちらっと見えると思いますので、本当だったら堰の上を渡って魚道の端まで、来てほしかったんですけども、若干水量ちょっと多いので、危険かなと思います。向こう岸まで回って、簡単に様子を見てみたいと思いますので、すみません、移動します。



○話題提供 安田 陽一氏

石をモッコと言って、鉄で網状に組んだやつでに入れてクレーンで吊って一回下に下ろします。

それで下に下ろしたあとに、ワイヤーで石を玉掛けといってこいつを結びます。これを、一回クレーンで引っ張って所定の位置まで持って行って徐々に、位置を調整してから、静かに落として石を組んでいきます。そのときに一番気をつけなければいけないのは、1 t 以上大きいと2本のワイヤーを使うのですが1 t より小さいと1本です。1本でやると真ん中にきちっとバランス良く組まないと、落っこちゃいます。ましてや、このように雨が降って石が濡れていますと、以外と滑りやすいんです。作業を急いで、クレーンを早く動かしますと、その振動で、ずれる可能性もあります。なので、普通基本的作業する時は、クレーンであげて、上に来るような時、人は絶対に下にいていけません。

はなれて、見てください。

この石に水が一番ぶつかるところにあり、石組が壊れやすいところです。そこに対しては直接石が当たってはねるような構造にしなければいけない、ただ普段からそこに石が、なくて常に根元が当たってますと、泡だらけになって、遡上の経路にもならない、いうことで石をその上にかぶせて、下の方に水みちが通るようにします。ちょっとトンネル構造に少し特殊な技で、いまそのへんの作業をこれからするために、材料となるものを今、下げてもらっている最中なので、ちょうど今、公用車がきましたので、これからヘルメットと長靴とはいていただきますので、どうぞ奥の方にお進み下さい。

石組み魚道の下の方に来て見ていただいてわかりますが、結構隙間があるんですね。そうすると、増水したときにこの隙間から流れるようになっていきます。下のトンネルから魚が、上がれるような構造になっておりまして、今ここも、改善したのは、上からの越水して空気がかなり混入して、遡上経路を妨げてしまうので、トンネルに出ます。大きい石の裏側がトンネルになって、また裏の方にトンネルがあって、そこを筒ぬけるようになってるんですけども、今ちょうど大きな石の間の部分が、噛んでないので、もう一回組み直します。ちょっとした妥協すると壊れることになります。必ず接点をちゃんと設けてあるかどうか一番重要なことです。相手が、らぐら動くようだったら、それは噛んでないっていう証拠ですので、石がきちっと組み合うっていうことが重要なので、そのために、裏表とか、左右替えたりとか色々やります。一つ一つみんな形が違うので、そのへんを意識して、組まないと、結構むずかしいことになります。今ここでやってるのが、石が滑りやすいので、ワイヤーとのすりあわせも、非常に弱くなります。ですから、それでも最大の注意を払ってやって行くっていうのが現状です。

ちょっとこの角度から作業を見てください

魚道の場所というのもありまして、今、下見てもらうと下流側見てもらいますと、魚道の真下に草が生えて、あれもっと今日雨降ってますけど、水が少ない時は、もうほとんど水がないです。上がるにも降りるにも、降りたら陸地に、ほぼ陸地の状況なので、役に立つはずもない状況です。上の方の段も一番上流側の段、そこも堰とだいたい同じ高さになってます。そもそもが堰と同じ高さになって、その段階で水ほとんど越さないよね。上らせる気がないっていうレベルの魚道なんですね。先ほどウナギそれでもウナギは、脇を通れると言いましたが、見ての通りどすんです。直角です。垂直。この状態だと、ウナギも迂回もできないそういう状況です。ハゼ、ハゼとかの仲間、壁ちょっとくつついて、上の方から行こうにも、上、水ない下、ストレーナー状態なので通れない、じゃあ、アユ、いわゆる泳ぐ、精力のある魚、下の所はストレーナーなので無理、上通ろうにもほとんど水がないし、壁ですので、上落ちてきたとしても、上がるはずもない。水が増えた時、ようやく行けるかどうかなのですが、問題は今度下流の先っぽの位置があります。アユ上る時には流れを感じ、流れの方に向かいます。上流ってこっちだなって判断します。そのとき下に突き出てますよね、メインの流れが向こうにありますので、向こう側行っちゃうんですね。魚道に向かってこないです。つまり、アユがこない所に先っぽがある状態にあるんですね。そしたらアユは、流れのあれ、どこから上ろうかと、堰の前あたりでぐるぐる回る。

来たとしても、ぐるぐる迷子になってます。そのまま上れずにそこで、鳥の餌食になるかそこでずっと過ごすこと・・・今魚道はそういう状況にあります。今泳げるアユとかウナギの話もありました。今度、エビ、カニ、どうでしょう。エビカニ類、カニも通れないエビも上がれないそういう状況です。今上がるって話しました。降りるとき、絶壁です。水が上から落ちるとします、急激な落差で落ちてきます。たたきつけられます。下で、あわわしたところに、たたきつけられ、落ちてきます。そんな状態だと生存率が格段に落ちます。降りる面においてもそうです。降りるんだったら、向こうの堰の方がまだましぐらいなレベルです。下はカーブになっているのでまだ、するっと落ちます。降りるも上るも、考えられてないちょっと魚道作った方には手厳しい話になりますが、そういう状況のものなんですね。今。それが今の魚道の現状です。実際全国各地に作ってちょっとあまり生きてないよね。もしくはこれアユかサケしか考えてないよね。全国各地にあります。人間がターゲットにしている物って先ほど誰かおっしゃってました。ターゲットにしている魚だけじゃなくて、もっといろんな生き物が使う物だと考えて作っていかなくちゃいけないのかなと思う。そこで石組み魚道は生き物目線ではどうなってるかを、これからまた、見て行けたらいいなと思います。



第4分科会「川とまちづくり（新しいミズベリングの提案）」

ファシリテーター：泊 伸明 氏（NPO法人 川塾北九州 理事）

○分科会の概要

川の体験活動では多くのケースが川自体を利用してカヌーや川遊び、安全講習などを主として活動していると思う。それは川自体の魅力に惹かれて参加者が集まって来ているのではないか。もし、川の体験活動がまちの賑わいやまちの魅力発信に発展した取組みになった場合、その効果は川のみではなく、そのまちの大きな魅力に変わり、川を中心としたまちの活性化に繋がるのではないか。

この分科会では、川周辺のまちと一体となったまちづくり「新しいミズベリング」について考え、その結果を全国から来た参加者の皆様に提案するもの。

○議事要旨

1 グループ分け、プログラム説明

街中の川と上流の川、どちらが好きか挙手してもらって2グループに分けた。

2 自己紹介、参加者の活動紹介

グループ毎に自己紹介として、氏名、所属、川との関わりや活動紹介を行った。

3 事例紹介

～川という公共空間をつかったまちのコンテンツづくり～

○発表者 日野川流域交流会 田中 謙次 氏

〔発表要旨〕

私は、RACトレーナーで各地地域において講座をしています。親子、子供たちや若者を相手にして講座やイベントを行っています。

1つ目の事例は、福井県福井市にある足羽川の「川テラス」について紹介する。この川は夜ライトアップし、この地域は桜百選に選ばれている場所である。

①川を知る：そこで、「川テラス」を行うため、近くの人達とコラボして、コンパネを使ったロングカウンターを設置してワインバーを行った。カウンター幅は45cmであり、人が交流できる絶妙な距離感である。

②ファンをつくる：そうすると、通行人が来たり、音楽を奏でたりするようになった。ワインは、紙コップを使用せず本物志向でワイングラスに注いだ。近くのマンションの住民もこの活動を見て面白そうだと言って参加した。そこに新たな発見がある。PRもあまりお金がかからなかった、続けている内に、口コミやSNSでシェアされ、最後にはヤフーニュースにも載った。

③既存コンテンツを再評価、仮設、ねらい、戦略立案：そして、県や市、大学、JC等、色々な人達が集まって川をイノベーションするようになった。

④限られた資源から優先順位をつける：どこから手を付けるか、どれが本当におもしろいか等、数年前に福井都市戦略が一枚の絵にしていたが、自分たちは優先順位をつける。行政などはまちづくりを一気に行うが、自分達は小さなエリアから、できる事から行っていく。

⑤コンセンサスと実行を分けるトータルプロデュース：すると、まちのリノベーションコンテストが開催され、食と川の結びつきを考えるようになった。組織づくりやトータルプロデュースを行う。そして、河川の包括占用申請を行って夏にイベントを開催し、まちの中にお客さんを入れていった。

川の新しい市場を創造するリバーマネジメントでは、ストーリー性がなければファンはつかない。準備の段階から、自分達のファンを創り出す。これからの川という公共空間の価値は、河川敷は民間型パブリックスペース、河川区域と

隣接地もあいまいな使い方をすると境界がなくなって人が来る。水辺でバーやカフェを行う。川を起爆剤にしてまちを創っていった。人と店、人が中心でキャラクターのある水辺エリアを創ることが大切である。ちなみに水上はRACが得意である。

次に7月7日に関係者や知人を総動員で「水辺で乾杯」を行った。エコノミーとビジネスとあるが、ビジネスは契約のこと、エコノミーは地域が潤い、私の利益を地域に還元することである。日野川流域交流会は、全国初で川という公共空間でシェアリングエコノミーにチャレンジした。河川管理者に、河川敷を一か月貸して欲しいとお願いし、イベントする人をまとめた。安全管理や川の使い方などすべて自分が行った。半年お願いしてやっということができた。いろいろな人が集まったパラダイスリバーを実施した。

バーベキューや会議やカフェ、レストランなどみんなで考えて作って実施した。おしゃれなスペースを作った。メリーゴーランドのようなテントを作った。増水した時にすぐに撤去できるようにした。同時に普段使いもしている。地域の人たちがそこでミーティングを行ったり、女子高生が使ったり、イベントをしたりしていた。あるものとあるものをつなぎ合わせている。ある人などが水鉄砲大会を行ったりしていた。

川からつながるおもろいまち、特に行政の人は耳が痛いと思うが、川からつながる「おもろいまち」を創りましょう。さあ、あなたならどうしますか？

4 企画前の条件設定説明

- ・1班：紫川下流（街）、・2班：紫川上流（田舎）に分かれて検討
- ・紫川上下流の現状のイベント等を紹介
- ・各グループに下書き模造紙と平面図配付

【条件設定】

①目的 ②事業内容 ③仕組みづくり（組織体制、動かし方、許可申請整理） ④持続的な取り組み

5 企画検討

- ・各グループで新しいミズベリングの企画検討開始。（模造紙と付箋を使用）
- ・（検討する上での田中氏からのアドバイス）行政や法律がかかわってくると計画がトーンダウンしていくので、スタートは100%を超えるアイデアを作る。するとトーンダウンをしても計画が半分くらいに収まることになる。企画検討は突拍子もないアイデアをした方がよい。条件設定に、「誰に」がないのでキーパーソンが必要である。何かを考えるときに誰にと考える。身近な人でもよい、子どもが小学校3年生だからその人を楽しませるなど、具体的に考える。ワインバーはターゲットを30代で設定したが現実的には40代の上司と部下が多かった。「誰のために」を明確にすること。

6 提案とりまとめ

あらかじめ用意している紫川下流と上流の平面図をベースに各グループで出たアイデアをとりまとめた。

7 提案内容発表 ・ ・ ・ 提案内容発表（各班8分程度）

（1）上流グループ （発表者：山根氏）

紫川の上流をモデルで検討する話だったが、無責任な事はできないという意見があり、自分達が活動している川の課題を出した。川の再生、川の危険、川を知らないので事故が起こる。したがって、川のことを知ってもらう活動を題材に選んだ。子どもたちをたくましくしたい。大人も含めて川のことを知らないことが危険である。ターゲットは小学校低学年。サブタイトル「川ガキ養成塾」川の体験をしている人が少ないので川の冒険体験を前面に打ち出した。わざと川岸から落とす等、危険体験を行う。飛び込んで、魚を捕まえる。手づかみや地域に伝わる伝統漁法で魚をとる。魚をさばくなどの体験。子どもがさばき、おうちの人が料理をする体験をする。そうすると、楽しくて危険を体験ができる

のではないだろうか。川沿いで史跡をつぶすという事例があったが、川を知らないのもそういうことが起こる、いじれないなど、川も知れば知るほど愛着が生まれてくるなど、川の歴史も含めて体験をして欲しい。

（２）下流グループ（発表者：岡本氏）

このグループはアイデアを羅列する形で発表する。

左岸と右岸で明らかに分かれている。左岸側は緑が多い、右岸はサラリーマンが多い。

イベント系ではないか？大きな左岸側はファミリー系、水上マーケットを行う。船の常駐で船の起点ができる。泳いで、貨物船を触って戻る。泳いで自転車で走って戻ってくる、トライアスロンなど。橋からの飛び込みなども考えた。屋形船を常時行う、薪能も面白い。筏レース、大声コンテストなど市庁舎を使ってトライアスロンをする。河川プールも作る、横でビールが飲めるようにする。護岸を歩くと落ちそうになる。水に触れられる空間を作る。

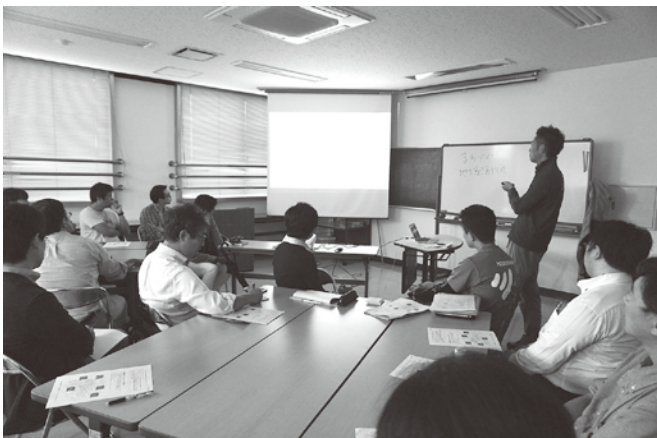
右岸はサラリーマンをターゲット、サップで出勤、会議を行う（打ち合わせなど）のぼりを立てて会社の宣伝にもなる。仕事で使うのなら通学で水上バスを使う。お昼は出張のお弁当屋があってもよい。リラックスで植物も植える。飲み屋さんなどを作る。

カップル向けは、ガス灯を作って、暗い空間を作り出す。かがり火など。木を植えたりする。川の中に入れるスライダーを作る。左はファミリー、右はサラリーマン向けにしている。

8 実現性の検証、講評

・日野川流域交流会の田中謙次氏から、各グループの提案について講評。

上流が危険について、安全についてはRACの専門である。下流はアイデアをプランニングする。短期、中期、長期計画を作った。はじめにワインバーを作った。小さいところから火をつけて、面白いことをやっているとどんどん広がっていく。全体がシティプロモーションになる。コンテンツづくりが重要である。専門家集団を作る、何かしら専門である。行政も専門家である。国は予算をつくる専門家、市は条令を改正できる専門家、古くなったことを良くするために変えていく専門家になって欲しい。



分科会報告～パネルディスカッション～

議事録要旨 10月15日（日）13:00～14:30

【コーディネーター】

平山 康弘 氏（NPO 法人 川に学ぶ体験活動協議会 理事）

【パネリスト】

佐藤 ともえ 氏（RAC）（第一分科会）

山下 吉弘 氏（NPO法人 みずのとらベル隊）（第一分科会）

佐藤 陽平 氏（RAC）（第二分科会）

安田 陽一 氏（日本大学 工学博士）（第三分科会）

橘 昌憲 氏（RAC）（第三分科会）

泊 伸明 氏（NPO 法人 川塾北九州 理事）（第四分科会）

○第一分科会 佐藤氏

第一分科会報告からさせていただきます。

まず第一にみずのとらベル隊の山下さんから熊本地震、ご自身の被災体験を交えてお話ししていただいております。ご自身が被災される前、3.11の起きたあと、被災地域を支援活動のために回っていらしゃったそうなんですけども、被災地の大変さ、悲惨さを伝えていた、その時まさか、熊本地震、ご自身が被災者になるとは思ってなかったということをお話していただきました。山下さんの場合は、アウトドアのスキルがありましたこと、あとは、ご高齢のお母様のこともあり、避難所に避難されることなくご自宅で避難生活、送られていて、被災者の苦しみつらさを身をもって体験したというお話をしていただきました。力説されているところですが、その際、シュミレーションが必要です。まさかの事態それが、被災なのでクロスロードという今回手法を紹介していただきました。これは内閣府のホームページに、あるんですけども、防災シュミレーションゲームというのがありまして、こういう事態に直面したとき、どう対応すべきでしょうか。みたいなことが紹介されてるんですけども、今回、時間が短かったので、クロスロードゲームをするのではなく、そこからヒントを得て考えていただいた設問を3つ設けていただき、それをグループごとに討論していただく時間をいただきました。続きまして、中川先生の方から、平成29年7月九州北部豪雨についての報告ということで、被害状況の説明をいただきまして、避難にあった地域その後の対応ですとか、今後の対策などについて新たな取り組み反省点等をお話、ご紹介いただきました。防災情報に強くなろうですとか、後は自助、共助、公助、という3つがありますけども、自分の命は、自分で守ると行政は最初から細かいところまで皆さんの手助けをすることができない、だから自分の命は自分で守るそこを、ベースにさせていただきたいというお話をいただいたあと、ワールドカフェということで、展開しました。これもあまり、ご存じない方、第一分科会多かったんですけども、討論ではなく議論ではなく、みんなで意見を交換し合う対話を大事にするそういう試みなんですけども、テーマをラックとして、自助を促すにはどうしたらいいでしょうか。ということで、いくつかのグループに分かれたものを、2回シャッフルしまして、同じテーマについて、それぞれ、話し合ってもらいました。いろいろルールがあるんですけども、同じ人だけがずっとしゃべり続けるのではなく、一人2回は必ずお話ししましょう。テーブルクロスのかわりに、大きな模造紙をテーブルの真ん中に敷きまして、おもいおもい、思いついた事これいいんじゃないと思った事など書き留めてもらって、それをみんなで、見ながら、そういう話もあるよね。っていう感じで、いろんな意見を引き出す場を設けました。今回の、それぞれのテーブルによってぎっしり書かれている隙間ないんですけど、っていうところもあれば慎重に話を重ねていて、吟味しちゃったかなというところと、いろいろあったんですけども、今回第一分科会、川の被災、災害についてということなんですけども、それプラス新しい手法、クロスゲームということと、ワールドカフェの手法を用いて、ご自身の活動地域に、戻られてから防災について、

RAC らしく自助努力を促す活動を行っていただきたいというところで、話をまとめました。そして最後に、久住さんの方から災害時にトップがなすこと 24 箇条ということで、そちらの報告を読み上げていただきました。これは、平成 29 年 4 月 10 日に災害時にトップがなすべきこと協議策定会議ということを経て、被災地の組長さんたちが集まって作られた、ほんとに実体験に即したトップがなすべきこと 24 箇条というものがあまして、それを読み上げていただいたんですけども、大変、感動する内容でして、詳細まで語っていただく時間はなかったんですけども、その 24 箇条読み上げていただくだけでもこんなにも、親身になって、市民の立場になって市長さんたちが、考えて下さったなあ。その事実だけでも胸を打つものがございました。こちら、現物の方は、国土交通省のホームページですとか、内閣府ホームページからダウンロードできますので、内閣府の防災情報のページにも添付されてますので、是非これを皆様、ダウンロードしてご一読いただければと思います。以上、第一分科会からの報告です。

○コーディネーター 平山氏

今のお話ですが、ワールドカフェとクロスロードゲームですね。二つの手法を体験してこれを地域に持ち帰ってもう一度我々、RAC の人間として地域で防災を考える、そのきっかけにもなったらと思いました。

ちょっとひとつお聞きしてよろしいですか。今の久住市長からのお話の、24 箇条ですが私たちに、何か関係のありそうな、一番印象に残ったものはありますか？24 のうち…。

○第一分科会 佐藤氏

すべてを覚えきれてないところが、申し訳ないですけども、私が一番聞いていて印象に残ったのは、火災現場で火を消しに行くのに、がれきの中に閉じ込められてしまっている方を発見したとしても、火を消すことを第一にというようなそういう心得、信念を持ってことにあたるんだというところに、非常に感銘を受けました。

○コーディネーター 平山氏

はい、どうもありがとうございました。第一分科会のご報告、佐藤さんに、していただきました。ありがとうございました。それでは、続いて第二分科会の内容と報告をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

第二分科会 佐藤氏

ひとねるアカデミーの佐藤陽平と申します。よろしくお願いいたします。第二分科会なんですけれども、E ボートの語りベ講座ということで、河内と文化の体験、紫川を E ボートで下るということを行いました。どんなことをやっていったかという、写真で見ていただきたいと思います。これは、語りべさんたちの、ノートなんです。実は、語りべさんていうのは、一般市民の方たちです。何かのプロの人たちが、これを伝えるために何々をしてと言うわけではなくて、ここに住んでいる市民の人たちが自分たちの町を調べて自分たちで調べながら何を伝えられるのか、ということを作っていく、こういう本とかノートをまとめているということがあります。この皆さんたちです。実は、今日はじめて会ったという方たちもいらっしゃいました。こういう組織だって何かしていくというよりも、今回の機会によってこのメンバーが繋がったということもあるんだというお話でした。そこから、こういうふうなよくある技術のうえで、私たちにっては、体を動かして、これから乗り込むぞというところなんです。私たち RAC の会員さんが、漕ぐということでもあったりするので、慣れたところもあったんじゃないかなというふうに思います。雨は、そこまで強くなくてとてもやりやすい状態だったんじゃないかなと思います。語りべさんが、一番トップの前に座って、皆さんの顔を見ながら、あそこはこうだったんだよ、あつだったんだよ、っていうような話をしてくれました。その後、分科会はこのように皆さんで集まって、協議方式という形で、

話合ったり、そこから築きを深めていくってというような形式でやりました。この後ろが、階段のような感じなんですね。ここに語りべさんたちも来ていただいて、皆さんと一緒に考えていったりとか、そんな時間も作ることができました。これは、右の黒い瓶に入っているのが、昔の紫川の水質の状態ということで、あんなに汚かったんだなということがわかりました。〇〇〇みたいながあって、ちょっと取ったらそうとうプーンと臭うんじゃないかというのが、見てわかるそんな場所で私たちは話し合うこともできました。このメンバーです。今回、やってみてまず川を下ってから感想どんなものが出たかっていったら、「正直、うらやましい」「すげえいう」というものがありました。あとは「どうやって、カヌーを引っ張って行ったのか」という方もいらっしゃいました。一つ一つ橋がいくつもあるんですけども、その一つ一つにストーリー性があるってということがわかって、これはただ、語りべで、語って下るっていうよりも、ビジネスとか観光とか様々な、違う分野にも繋げられるんじゃないのかな、それだけのポテンシャルがあるんじゃないのかな、という話も出ております。この川を下った時にわかったのは、子供が遊べる場をあえてわざわざ作っている。そういうものは作らなくても構わないでいい状態でもあるかと思うんですけども、この町の紫川っていうのはわざわざ子供たちに水に触れられるってというような仕掛けまでも作っているということになります。歴史を感じられる、これでいうのは、自然の石を使った石垣を使ったりとか、作ったりとか、橋の名前も昔の人たちが作ったことがわかるような名前にしているとかです。生態系を守る場ってということが、様々な所で散りばめられているっていう事がわかりました。今回は、何よりも語りべの皆さんの存在っていうのが、とても私たちにとって、学びになったんじゃないかなということが出てきました。皆さんと協議したのが、なぜ、40年前からの今のようないきれいな水質に変わったのかっていうこの復活劇が出来たのは、なんでなのかっていうところを想像していきました。ここで、皆さんといろいろ語り合っ、市民の方も来て下さったので、そこで話を聞いていたときに、市民だけでは、難しいよねっていうことがありました。行政との共同がなければ難しかったなあというような話と、そもそも洗濯物が干せない状態だったこと、お米を炊いたとしても臭くて食べられないというような、そんな生活であったから、なんとかしないと生きていけないんじゃないかっていうぐらいの、危機が目の前にあったっていうのをおっしゃってありました。その困りごとがあるからこそ、共通認識が生まれてそこから数人の女性が運動を起こしていくっていうような、もっと替えていこうっていうような話が出てきて、今の状態になったんだっていうのもありました。北九州のイメージが悪いっていうのも出て、ドンパチ、ちょっと危険なイメージ、公害のイメージ、そういうものがこれから入って、そういうイメージもたれないようにして行きたいなというようなことも、あったんじゃないかなということです。私たちラックの会員として、乗らしてもらってですね、一番興味関心があるのは、川に学ぶ社会にしたい訳です。だから、今回の一般市民の皆様語りべさんたちが、私たちを乗せてみてどうだったのっていうようなことを質問しました。私たちにそういうふうに教えてくれた市民の皆様がどんなことを感じたのか、そうすると、より街のことが好きになりました。今回の件ですね。もっと多くの市民に伝えたいというとても前向きな言葉です。自慢しなくなった。いい事ばかり言いますね。歴史は語り継がないといけないと思うようになった。さらに、全国に私たちの町は伝えられる物があるんだと思った。それに火がつけました。っていうような方もいました。私たちは、指導者を育成するっていうことを、ラックとしてはやっているんですけども、市民の中で皆さんが、こういう場を作っていくことによって、より火がつくっていう思索ができるんじゃないかなっていうことが参考になったんじゃないかなということが、わかりました。今回の件も、皆さん、ラーニングピラミッドってご存じですか？ラーニングピラミッドという考え方があって、学びの定着率の話なんですけれども、ピラミッドで一番上の、授業とか受ける、ただ話を聞くっていうのが、学びであれば何%の定着率かかっていうことを考えられる図式があって、授業ただ聞くだけ、それは何%の定着率なのか、5%なんです。それしかないっていうふうに言われております。自分から本を読むとか自主的に学ぼうとするとそれでも10%です。先ほどみたいに議論するとか、対話するっていうのは、50%と言われています。だいぶ上がってきました。では、体験は何%だと思います？体験は75%です。もう一つ上の

パーセントの90%のものがあります。それは何かというと、人は教えることによって、学びの定着率が身につくという考え方が、わかってきている。となったときに今回の語りべ制度というかこの仕組みってというのは、市民の人たちが自分たちの町のことを学んでそして、教えるっていう作業になると思うんです。このことによって、市民の人たちにも火がついたし、自分たちの町のことより知れたそして、川の文化っていうところに誇りを持つっていうようなそんな仕掛けになってきたんじゃないかなというふうに思いました。ということで、私たちはそれぞれ全国で自分たちの町そして川っていうのがあるんですけども、そこでも例えば今回の語りべのような教えるっていう仕組みがあることによって、より私たちが目指す社会づくりに繋がるんじゃないかなんかということを学びました。これからは、人口減少とか、未来の年表って河合雅司さんの本、読んだことありますか。2040年には、自治体の半数が消滅すると今のままでいけば、そういうふうに言われてる本もあります。様々なピンチがあるんだけど、今回の紫川のカヌーで下った時にどんなピンチになったとしても、真っ暗な真っ黒な水になった川であったとしても、自分たちの努力それによって変えられるんじゃないかなんかということ学んだところでもあります。ですから共同の街づくり市民と行政と企業など、どんどんどんどんこれからは、共同していくことが大事なんじゃないかなんかということを学びました。はい、ということで、どうもありがとうございました。

○コーディネーター 平山氏

はい、佐藤さん、ありがとうございました。私このEボートに今日乗せていただいたんですけど、めっちゃくちゃ楽しかったです。お話聞きながら、雨は降っていたんですけど、それでも気にならないくらいとっても楽しい一時間くらいのツアーでした。やあ得したなあと思って帰ってきたところです。それでは、続きまして、第三分科会のご報告をお願いしたいと思います。橘さんよろしく願いいたします。

○第三分科会 橘氏

RAC 事務局橘です。よろしくお願いします。第三分科会は石組み魚道講座ということで、安田先生の昨日の基調講演と現場を実際に見に行き、元々は、一緒に組んでやっていこうかなんかと思ってたところですが、実際に一緒に作業するまではいかなかったですが、上や横からもしくは下から見てもらう形でやってまいりました。実際の写真ですが、こちらが、今日の写真ではなく、9月26、27に、安田先生が実際に組んでいたときの写真です。今これは現場の上流の方から、見た写真なのですが、左岸側の方に土嚢が積んであると思います。こちら辺です。ここの下に積み始めてるところです。ここに、古い魚道がある状態です。積み始めということと、ここに大きい石が転がっている状態で、一番細かい所まで残している状態です。ものすごい、人では抱え持ち上げられないサイズの石を使いますので、こういったクレーンで吊る形でやっています。今ここに大きい石がありまして、これを今一番端っこの方、ここ流れが強く集まってしまったり、影響を受ける所ですので、一番最初ここに、積んで行っているところです。積んで行ったところで一番下の段、2段目あたりを積んでいったところで、堰の所まで来たところです。実際これやっている時、ひとつひとつ石の形、違います。大きさも違います。上の面、下の面、横の面いろいろ見ながら、実際これから置く場所の大きさどうやって角度をつけていこうか、どういう向きに置いていこうか、そういうことを確認しながら1個1個積んで行っているところです。ここから、実は今日の写真です。実際この現場に行く前に、ここの会場の前をマイクロバスで出発しまして、バスの中で参加者の皆さんに、生き物の事をお伝えしました。バスの中で、魚道って何のためにあるんでしょうか、生き物、上るためそして昨日安田先生の話、基調講演やりました。上るだけじゃない下りる、上ったり下りたりその両方の役割が必要だよ、そういう話をされたと思います。実際どういう生き物が上がるのかな、いろんなタイプがあると思いますが、例としてあげたのはウナギ、ぬるぬるした状態、泳ぐ能力はそこまで高くない、ただ、脇の所を水の無い、ちょっと湿った

所であれば脇をすり抜けることもできるウナギ、そしてアユ。こちらは皆さん目にする、聞くことも多いかと思いますが、アユは中層泳ぎます。泳ぐ力もそれなりにあります。先ほどの上る下りるに関して、アユが一番わかりやすいと思いますが、川で卵からふ化した後、海へ下ります。川を下りる必要があります。この後、海です。ある程度大きくなった子魚が、今度は川を上って行きます。下る作業上る作業、このどちらかが途絶えても、激減してしまいもしくは、生きていけなくなります。その両方の対応が必要ということです。今アユとサケを紹介した。今度アユよりもサイズの大きい魚、といったサイズの問題もあります。例としてアユ、サケそして今度中層を泳ぐ魚とは別にハゼの仲間、ヨシノボリの仲間、それは水の底の方に張り付いている泳ぐ力さほど強くないけど、休みながら休みながら、張り付いて休みながら休みながら、上って行くそういったタイプの魚、そしてカニ、エビ、泳ぐ力が歩いたり、そういった別の上る魚、魚ではないですね、生き物もいます。今までの魚道で実際問題となっているとか、特定の魚を想定している部分があります。ただ生き物というのは、ここの川でもそうですが、いろんなタイプの生き物が生息して行き来をします。そういったものを網羅して行かないと、対象になってない生き物は生きていけない川では困るという話になってます。そういった生き物の目線になって川を考えていこう、今回、魚道見ていこうよっていうところから、まずバスの中で話して、そこからスタートしております。実際現場に着きまして、多少小雨、降っている状態ですが、安田先生が今こちらで、来るところですが、それをちょっと上から見ていただきまして、写真順番はあれですが、安田先生の報告に、基調講演の方にありましたとおり、少し先日の雨で、落ちてしまったこういった土とかを戻しているところです。それを少し見ていただきました。その後、今、下流側の橋があるのでそこから全体を見ていただいているところですが、この後、川の真ん中の所に、古い魚道があります方、そっちの方を見に行こうということで、皆で歩いて行っているところです。今、非常に小さくて見えにくいのですが、ここの堰の一番上と魚道の中の、ここの一番上の面が、魚道の方が高い状態になっているんですね。水が通らないです上から、そういった問題点もこっちから見るとわかるんです。反対側、川の右岸側の方に回って、魚道を見たところ。もう入り口のところに草が詰まっています。先っぽが下流の方に出ているので、魚も入り口を見つけにくい、中の方に、魚道の中の方に、段が付いています。その段の所が、水が通れない、下の方に小窓が開いているのも、石とか木の枝とかで、埋まってしまって、ストレーナー状態です。折角、窓を開けてても埋まってしまいます。当たり前の話ですけれども、そんなストレーナーで上れない、そういった堰、魚道になっていました。っていったことを参加者の皆さんと確認して、また戻ってきました。ここで、下の方に下りて今度、重機が大型の機械が動いて、機器が動いているところを慎重、工事の皆さんの迷惑かと思いつつも、下りて行って、下の方から見ているところです。こちら安田先生が、ひとつひとつの石を実際に、すごい重い石ですので、吊り上げた状態から運んでひとつひとつセッティングしていくというところです。今、吊り下ろしたところです。これは、少し作業を止めて、安田先生に解説いただいているところです。このとき、解説いただいたのが、堰に接する部分そこは、流れがものすごく強く当たるよ、強く当たりすぎると白くしづきがたちます。そういったところは、魚は上りにくい、生き物も上りにくくなりますので、そういったところにあえて大っきい石で水を受ける状態にします。その下の方に隙間を作ってそこを通れるようにしましょう、するっていう工夫をしていますといった話をしているところです。こちら辺は説明しながら作業しているようなところです。安田先生に戻ってまた、続きをやっているところです。こういうふう現場で実際に作業しているのを一緒に見ながら、こういうふうしようとか、石の積み方のコツのところをお話したり、そういった現場見学会に近い状態になりました。実際、これをやってみて、魚道の方を作る川を考える時についつい我々人間は、人にとっての、価値のある魚、アユもしくはサケとか、おいしいウナギ、おいしい魚とかそういった価値のある魚に目を向ける価値です。あと、希少種とかもそうです。希少な生き物を守らなければ、そういった方向に行きがちなのですが、実際この魚道でもそうですし、ほんとに大事だと思うのは、当たり前にそこに当たり前にいる生き物が当たり前に生活していけるそのような環境を作っていけば、そういった希少種は、価値のある生き物にも同じように生活していける、また、我々の気づかないところで、

関連性をもって生きているのが、生き物の世界ですので、当たり前なのは当たり前前に生きられるそういった環境を作っていくことが大事なんじゃないのかなと感じた分科会でした。

○コーディネーター 平山氏

はい、どうもありがとうございました。橘さん一つお聞きしたいのですが、どうですか何が一番難しそうだなって感じましたか。

○第三分科会 橘氏

そうですね、実際水がこの後、今、水、土嚢で止めてますが、水を流した時に、実際ここの石に当たってその裏、どうなっている、どう流れていくか、生き物が、こう通っていくだろうと、いろいろ先ほどウナギとかアユとかサケだとか、あとハゼの仲間、そういう生き物ひとつひとつ、いろんなタイプを想像しながら、そういった生き物、様々なタイプに対応できる形をつくっていく、いろんな上るシチュエーションを想像しながら組んでいくっていうのが一番難しいかな、意識しなきゃいけないかなとは思いました。

○コーディネーター 平山氏

はい、どうもありがとうございます。後ほど、また、安田先生に詳しくお話を伺いたいと思います。はい、どうもありがとうございました。第三分科会のご報告でした。それでは、続きまして、第四分科会のご報告をよろしくお願いします。

○第四分科会 泊氏

川塾北九州理事を務めております泊と申します。改めてよろしくお願いします。では、第四分科会、川と町づくり新しいミズベリングの提案という題目で、このプログラム自体新しく取り込んでやってみました。そこで、これは、事例紹介のとこなんですけども、この中でまず全国から全然知らない人同士が集まって来ますので、まずは、グループ分けをしました。グループ分けの仕方が、ちょっと、上流の川が好きか田舎の方の、川が好きか都心部、都市部の川が好きかっていうので、まず、手を挙げていただきました。それで、最初、都市部の川が好きな人、全部で16名だったんですが、5人しかならない、みなさんすごく優しいんで、あと3人下流の方の川が都市部の川好きな人になってくれませんかって言ったら、みんなトントントンと挙げて、一気にすぐにグループが分かれたという状況です。あとは、上流域のものから川が好きなグループに分かれました。そのあとに、7人、8人ぐらい・・・そのあとに、グループ内で、自己紹介をしていただきました。今回のこの分科会の狙いとしては、ひとつに、皆さんの取り組み活動を知る機会にもなるのかな。なので、所属とか名前とか、活動内容、活動内容がない方は、川への関心事、関わりっていうのを紹介してもらってる、それで、だいたい皆さんどんなことしてるのかな、で、集まったメンバーは、地域団体として川遊びをやってる力ヌーをやってる、川と馬を絡めてパトロールをやってるとか、あとは、行政、県、県職として、福岡県の河川整備をしているだとか、そういったいろんなさまざまな人が集まっていたのがわかりました。その後に、ここにあります事例紹介です。この事例紹介は、日野川流域、福井県福井市にある日野川流域交流会の田中謙次さんに、事例発表をしていただきました。肩書きめっちゃめっちゃいっぱいあるんですけども、本人は全然たいしたことないです。言っていました皆さんはたいしたことあるないうふうに思っていたと思います。ここで、ご紹介したのが、タイトルとしては川という公共空間を使った町のコンテンツ作りです。これが田中さんがこだわったところ。コンテンツ、町づくりという言葉で町づくりは単なる行政用語よくわからないコンテンツづくりが大事なんだといったところで、今ある物を生かして、新しい使い方

川という公共空間を変えていくっていう取り組みをやっています。というお話がありました。ここが丁度その流域の足羽川という川です。ずっと田中さんのこの現場で、見てたら何か生かせるんじゃないかなと、この管理道の空間とか生かせるんじゃないかなと、すごく景色がいいな、ピンとひらめいたのが、ワインだ。ワインを飲もうここで。っていうのがきっかけだそうです。それで、町の人ワインショップをやってる人とかに声をかけて、この、一人、人がいますけどあれ、銅像なんですけど、誰もいないところにこういった形で、ワインバーと、テーブルセットを置いてここで、川テラスという取り組みをやりました。私はここで、今日集まってくれた人に、ちょっとお伝えしたかったのが、これって、いろんなプロセスがあるんです。っていうのを知っていただきたかったので、田中さんがどういう人にお話をしている人と一緒に考えてこれができたんだよっていったところなんです。そこには、間違いなく行政の存在っていうのもありましたし、プレイヤー、実際にイベントを動かしている人たち、そしてもう一つそれを宣伝するお客さんたちです。勝手にお客さんが宣伝している、例えばわかりやすいのが、フェイスブックとかに書き込む。それを見たら、それを見た SNS をやっている企業とかが、これおもしろいね、これを春の祭りに入れようかなとか、勝手に SNS で発信していったさらには新聞に載ったりだとかして、無料で意外と宣伝できるんだよっていうのをお話していただきました。これ、リバーマネージメントという言葉です。聞いたことあるかもしれないですけども、エリアマネージメントとかという言葉もあります。町、道路とかビルとか使ってその一帯のエリアを使ってそこをマネージメントして賑わいを作ろうとかありますけども、田中さんらは、川をマネージメントする新しい市場を創造する。ストーリー性がなければ、ファンも付かないので、そのストーリーを大事にした。大事なのはその取り組みが、いいねとなるかならないか、ふに落ちるかいなか、というところです。そのファンっていうのは、他人はどうあれ自分は好きいいところを自ら探したり、多くの人に語り出す、そしてファンがファンを作り出して、ファンづくり、これがほんとに、ピーアールに繋がったり、参画、プレイヤーに繋がったりというところにも、なるんじゃないかなというふうに感じました。ちょっと言ってみたらいいです。行政の方に、ちょっとこういうことを考えたんで、一ヶ月河川敷貸してっていうお願いしてみたら、そこは行政のこれだったらいいんじゃないか、というふうに言ってもらったと、それで目指すはリバーシェアリングエコノミーです。シェアリングっていう言葉、聞いたことあるかもしれないんですけども、市民と行政ってあるんですが、市民の中には、企業の人もある。企業がいたり、住民がいたり、企業も様々あります。例えばプレイヤーです。ワインを出す人、ワインを売る人、それはワインを売るのも得意です。チラシを作る。チラシを作るのが上手な企業等、そういった行政と手続きについて詳しい行政がいたりだとかするんです。そういった自分の得意分野を活かしてもらう、シェアリングエコノミーというのがあります。エコノミーとビジネス違いがありまして、ビジネスっていうのは、一企業の例えば、わかりやすいのは、利益のため自分の利益のためにやります。でも、エコノミーっていうのは、そこに公共を使って利益を自分たちの利益を賑わいづくりとか、活性化、町の活性化とかに、寄与することで、還元しますよっていうのがエコノミーです。それを川を使ってやるのを目指していると話がありました。これから皆さんで、新しい、ミズベリング提案をしてください、その前に目的、皆さんに条件を探してください。まず、目的と何をするか、事業内容、その事業内容を考える時に、どういったところをポイントにして考えたらいいかといったところを、田中さんに話してもらいました。このグラフ見たらわかりやすいんですけども、いろいろ手続き関係とか川の使い方を知っている人は、まず、こう考える。あっこ使いたいけど前後の占用したら、たぶん無理だよ。じゃあこういうのできないよね、管理道3mしかないから無理だよ、そんなこといったら始まりのスタートが50%から始まるんじゃないかな、50%から始まって最後0%の方にこれもだめ、あれもだめっていったら、落ち着くのがずっと20%ぐらい、結局やりたいことがあんまりもう楽しくない状態になる可能性があるのだから考えるアイディアを考える時は100%、できるできん関係ないまずは、まずは、アイディアはまず100%から目指していく。そっから、絞っていけばいいじゃないか。そしたら、落ち着くところは、70%とかそこらへんで落ち着くかもしれないので、意外とやりたいことがやれるんじゃないのっていう助言をいただきました。

今言ったような条件設定がこちらです。できれば目的の設定とか事業内容あります。その下に仕組みづくりとか、効果仕様とか書いてますけども、1時間しか議論グループで時間がなかったので、ここでは目的と事業内容、これをメインで考えてください。それと、よくある、例えば、バーベキューとかオープンカフェとかありますけども、それだけじゃなくて、新たな取り組みをそこにちょっと入れ込んでもらえませんか、新たな視点をといたところで、議論をしていただきました。こちらが、上流のグループです。上流グループの方、これ、最終的にまとめた資料なんですけども、このプロセスがちょっとおもしろくて、まとめる時間を実際10分以内でした。1時間のうちの、50分は議論、議論です。ああじゃない、こうじゃないいいながら、じゃあこうやろ、そういう話で50分、まとまるんですかね話を後ろで、僕もしてたんですけど、すごかったです。議論を50分かけてるんで、だいたいこの人何を考えているんだって、わかり出すんです。たった50分間で。なので、まとめがすごく早かったです。タイトルとか目的とかも、一瞬で決まって、ここで出たのが子供たくましくするっていう目的の川ガキ養成塾、危険体験をしようというところで、対象としては、親子です。親子で小学校低学年ぐらいからでも、ある人は親子でしようと、子供っていても60歳のお母さんと40歳の子供っていう関係もあるよね、そこは、親子でいいんじゃないかという意見がありました。そして、ここにあります、危険体験をしようなので、まず、川遊びをちょっとして、その後、川に落としてみよう、すごい高い所から一回落としてみよう、その後、手づかみで魚を捕って子供がさばいて、家に帰ってまたその魚を持って帰って、即さばいてるのを親に見せて、親に食べてもらおうっていう一つのコンテンツです。上流ではこういう遊びができるんじゃないか、実際に北九州では、こういう取り組みはやってないので、新しいミズベリングでした。私の中では。次は、下流です。都市部のお話です。こちらは福岡県の職員の方です。ここも同じく、議論に50分まとめに10分っていう形です。なのでちゃんと手書きする時間がなくて付箋をそのまま使って、ちょっとおもしろかったのが、ここはアイデアをとにかく羅列しました。分けてみたのが、グループ分けしたのがイベント型、ビジネス型、カップル型とようはターゲットを3つに、ちょっと絞って、お話をしていただきました。出た内容ですが、イベント型だったら、水上マーケットです。動くマーケットです。船に乗せてマーケットをするとか、後は、たきぎをやったりとか、護岸が急なんで緩傾斜にして落ちてても登れるようにしたらいいんじゃないのとか、そういった意見が出ました。後、トリアスロンとか、ビジネス型については、家からちょっとサップに乗って、家から川沿いまで出て、サップで出勤するっていう、出勤方法があるんじゃないかと思います。河川敷で会議したらいいんじゃないのとか、後、河川敷、カップル型でいくと対岸から告白するっていう大声コンテスト、告白大声コンテスト、結婚してください、遠くから、嫌です、そういったのが、聞こえてきたらおもしろいんじゃないか、後は、カップルのために、明るくしすぎない、なのでガス灯とか付けたらまた色がいい感じになる。いい雰囲気になるんじゃないかと、そういった意見が出ておりました。ここでは、目的とかそういったところまで行き着かなかったけども、こういった新しい取り組みの意見がいっぱい出ていました。最後です。田中さんにちょっと意見をいただきました。今後について。ここで、ちょっとおもしろかったのが、やたら行政の方に謝りながら、先に謝った後に、こういう川づくり、ようはコンテンツづくりをするときは、それぞれの専門家が集まってくると、非常にやりやすいです。さっきのシェアリングのお話です。じゃあ行政は何の専門家なんですかっていうお話がありました。考えました、やっぱり、その行政の人は、答えられなかったです。田中さんが伝えたのは、こういうことです。行政はお金を持ってくる。国とかから持ってくる。そしてもう一つ条例を改正できる。また、国であれば法令を改正できる、そういった専門家じゃないの。とお話があってこの会は終わりました。以上が第四分科会の説明です。

○コーディネーター 平山氏

はい、どうもありがとうございました。だいぶ詳しい計画づくりを皆さんでされたみたいですね。ありがとうございます。それでは、今、一通り第一分科会から第四分科会までご報告いただいたんですが、感想を言わせていただきますと、

もうどの分科会も、大変工夫をして特にやり方ですとか、進行の進め方、新しいプログラムを体験していただくとか、それから、話題提供者、とってもすばらしい事例を拝見するような方に来ていただくとか、四つの分科会ずいぶん工夫をされてやっているなあという印象を受けました。今の泊さんのお話ですと、皆さんがどんなことを考えて、まとめたもののお話があったんですが、ちょっとそこは、進め方を中心にお話いただいた分科会です。どんな内容のお話があったか、少しずつ詳しくお聞きをしたいと思います。まずは、第一分科会ですが、ワールドカフェですとか、クロスロードゲームどうやって進めたよ、最後にトップがなすこと24箇条っていうのがあったよというお話があったんですが、その話題提供いただいた山下さんから、全体を含めてご自身のお話もどんな話をしたのかなっていうのが一つ、それから、皆さん会場からこれでどういう話題がでるか、印象で結構です。ご自分の好きな形でいただいてよろしいので、ちょっと簡単に、分科会の細かい内容がわかるような、こんな話があったよ、わかるようなのがあれば、山下さんの話も、すいません。めちゃぶりで。よろしくお願いします。

○第一分科会 山下氏

わたくしの方は、話題提供として、実際に自分が被災して避難場所に、困ったりとか、要介護の母がいたので自分の車の駐車場で避難したりとか、避難物がなかったりとか、避難行動時に、14日が9時25分、16日が本震が1時25分で幸いにも、家族が全員いる時間帯だったので良かったんですが、もしそうでなかった場合にはどうでしょうかということで、避難行動についての話をさせていただきました。後、持ち出し日についても、自分の先輩埼玉県に住んでますけども、先輩、避難袋ちゃんと準備しておいてくださいよ。直下型が来たとき関東怖いですよ。大事なものは、避難袋は押し入れの中に入れて、押し入れの中に入れて倒壊したらどうやって取り出すんですか。いうことから、窓を割ってでも取れるようなところに避難袋を置いている、自分たちも余震がおさまる10月までは、鍵と財布は、玄関先に置いているそして、少々つぶれてもいいカセットコンロだとか、食品とかは、玄関の外にボックスに入れて置いたりした経験がありましたので、そういうことを踏まえて、皆さんに共有していただきたいということで持ち出し方についてお話をさせていただきました。実際に被災して、ラックの全国、ラックの組織、全国の皆さんから、支援をいただいほんとにこの場をかりてお礼を申し上げたいと思います。ここで非常に感じたのがネットワークの大切さです。何が必要かこれを使って隣の〇〇〇になったのは人の行き来も作っていただいて・・・私たちは宮崎と熊本の県境にいましたので、福岡から熊本までの交通が遮断されました。なので西胤さんや内村さんにも協力していただいて、物資を宮崎県、大分県側から大和町に運んでそれからピストンで燃料費をいただきまいたので、道路が寸断されたところ、熊本市内に毎日ピストンでそれを運ぶことができました。そこで、一番ありがたかったのは私たちを助けてほしいと言えなかった。大丈夫か。大丈夫です。しか言えないんです。でも、何かこれを使って何がほしい、これを使ってそういう声を全国のラックの会員さんからかけていただいて、ほんとにいい活動をさせてもらうことができました。ありがとうございます。

○コーディネーター 平山氏

はい、どうもありがとうございます。今のネットワークっていうお話なんですが、ネットワークを作ろうとってそう簡単にできあがるものではないと思うんですね。特にラックの場合は、こういう全国大会ですとか、先ほど泊さんから、参加者同士が、相互に知り合う機会がってお話があって、それで自己紹介もしたし、皆が打ち解けて計画づくりをしたというお話がありました。それと日常の活動を通じて、同じように顔をつきあわせて、ずいぶん長く、17回になりますけど、そんな活動をずっと続けてきて、ネットワークができて、そして熊本の時に皆が、何かしようって言えたんだと思うんですね。そんな機会にこの大会、とってもすばらしい大会で、また、それを少しやれたかなと思ってます。こんなものをもう少し続けてネットワークを膨らませていきたいなそんなことを感じました。それでは、続いて、

第三分科会にいきましょうか。安田先生に、橘の話でちょっと気になったのが、貴重種とかアユとか、注目される魚ばかりじゃなくて価値のある魚だけじゃないんだと当たり前の魚を大事にしなければいけない、とお話があったと思うんですが、それも含めて、石組みのお話を少し補足いただければと思います。いかがでしょうか。

○第三分科会 安田先生

ちょっと遅れて、皆さんと、皆さん11時半少し前にお立ちになったと思いますけど、私12時10分くらいまであそこで作業しまして、一応てっぺんまで全部石組みしてから、帰ってきたんですけども、先ほどの話の中で、いわゆる河川に本来いる様々な魚種、これ、先ほどいったように注目されてるものも注目されてないものも、含めてそういうものが行き来ができるようにしていく、今までやっぱり、その何も構造物がなければ、もっと川を前後行き来、移動できたんですね。それを工作物を作ったために、限られたものしかいかれないっていうのも、それはおかしいことでしょっていうことで、やはりいろんな生き物が生きるためには、流れの強い所とか弱い所とか、あまり水深はなくても、壁にそって這い上がれる所とか、歩いていける所とか、そういういろんな環境を作ることが、そこにいる生き物たちが違和感なく行き来できる環境になるだろうということで、石組みの配置っていうのも、いろんな流れを作り出すための仕組みづくりとか、今回、ちょっと苦労したのは9月の下旬に作って10月に出水があって、それで少し中の部分がえぐられたりとか、一番落差のある所で石が2、3個飛ばされたりしてて、その影響を受けて中の部分の少し組み方があやうくなっているということで少し組み直していかないといけないことだったんですけども、実は今回大きく変えたのは、越流している所から流れた石が、きっちと安定する方向に向いてなかった。どちらかというと、斜面の方向に向かって石が安定するように作っていたんですけども、今度は大きい石をうまく使って、越流している流れを石で一回受け止めましよう、トンネルにして、石の裏側の空洞を確保して、そこで流れの通り道をちゃんと作ってあげましようということに実は、工夫を変更しました。ですので、いろんな生き物が行けるためには当然先ほど緩やかな流れというものもある程度作っていかなくちゃいけないことなんで、そういう工夫が、今回やっていって、実際皆さんには水が流れている所までは、行かなかった、見ていただくことにはならなかったんですけども、組んだ状況の中で、これから地元の方が、折を見て、見に行けることは可能だなと思っております。

○コーディネーター 平山氏

はい、ありがとうございます。先生もう一つ質問させていただいてよろしいですか。昨日の発表にもあったんですけど、魚務、我々ラックでも同じように魚類の調査をしたり、それから河川の保全をしたりそういう仲間もたくさんいるんですけど、子供と一緒に石積みのような、そういういろいろな魚が登れるのが必要だとわかるような、石組みを利用するようなまた何か体験できるようなことがありますでしょうか。

○第三分科会 安田先生

今回はかなり背丈の大きい所でやりましたので、かなり流れも強く当たってくるということもあって、しっかり大きい石を使ってやりますので、なかなか普通の一般の方々が、簡単にパッパッパッとやれるかというとなかなか難しいっていうのは確かにあるんです。ところが、下流側から見ますと、まだ、落差50、60センチしかないそのぐらいの段差の所も結構あるんです実は。そういう所にももう少し小さめの石を使って置いて、魚の行き来できる環境っていうのは実は作れると思います。〇〇〇がなくても、たぶん作れると思います。その工夫の仕方っていうのは、やはり石をどういうふう、踏ん張らせるようにするに石が動きづらくするか、それから、石と石のちゃんとつながり接点っていうんですけども、それがちゃんと三点以上、下の方横の方、三点でちゃんとうまくつながりがあるかどうかとか、そういうところを意識して、

実は組み合わせればいいんですよっていうルールをもうちょっとわかりやすく、明文化して、後は写真とかを付けていくと、おそらく一般の方でもうまくいくのかな。今日皆さん見られた感想は、あれはできないと、たぶん思ったと思います。あれだけ大きい石を、いろいろとやってるんですね、それは、たぶん「あの人だからできるんじゃないかな、私じゃできないよね」というふうに思っている人多いと思います。確かにああいうちょっと大きいものについては、大型の重機でワイヤーで吊ってやらなきゃいけないんですが、石をうまく組んでいくっていうのが、やはり特に今回ちょっと若干痛んだ所をもう一回修復するっていうことは、やりづらかったところではあるんですけども、あれが一般の人におすすめすることは、私は、考えてません。やはりある程度技術者がきちっと、あういうことができるようにしてもらいたいっていうのが私のせつな願いです。もう少し小規模の方が、一般の方にした方がいいかなと思います。

○コーディネーター 平山氏

はい、ありがとうございます。石組みの必要な理由とかですね、そういう川の魚がどうあったり、そんな話を子供と川の中で体験しながらできたらいいな、やはり、クレーン使ってますので、やあ、あれは無理だな、先生のおっしゃるとおりで、私もそう思ってるんですけども、ありがとうございます。それでは、泊さん、ちょっとおききたいんです。

会社の方に、先ほど2つ計画があって、1つ目の方に、子供をたくましくする。これ、とっても我々、ラックたち興味がありまして川がきを先行してよろうかという話があって、何かもうちょっとその中で、皆でこうやって行こうというのがありますか。例えば紫川ですと、ミズベリングといいますか町と川と一体に作るような、先駆的なマイタウン・マイリバーがやってきた、そこで皆さんの考えてるものが、何かちょっとキラッとするようなものなにかあれば、お話ができれば、教えていただきたい。泊さんのご意見で・・・

○第四分科会 泊氏

新たな視点とこころいいですか。皆さん、やったことがないっていう視点は、川に落とすっていうのが一番と思ってます。川に落とすつまりちょっと想像したのがライオンの親なのかなと、思ったんですけど川に落とすんだ、でもそれで気づく、たぶん落ちた時に水飲みそうになったりとか、なかなか上がってこれないです。そういうところで、危機を感じるじゃないかなとそういう体験、さっき佐藤陽平さんの方からありましたけど、体験することがほんとに教育になるのかなっていうのがあえてそういう意見が皆から出たのがすごくうれしかったのと怖かったのとありました。北九州の方でも、そういったことができるかっていうと、たぶんできます。他の都市でもいっぱいできるんだというふうに感じました。後、効果事業・・・話の中で、出てきた。やっぱり川を知れば愛着がわく、愛着、地元のふるさとの場合、愛着をもって、もらうことがこれが効果ないんじゃないんですかね。っていうお話をしました。

要は、数字では表せないですねきつとなかなかなので、そういったこういう取り組みをどんどんやっていったらいいんじゃないかな、北九州の方のちょっと事例を紹介でいきますと、15年前に、私、今の職場、水環境課にいたんですけどその時に、17年前紫川作りましたよね。紫川見たら川に簡単に入れるように作ってるんです。マイタウン・マイリバー作ってるんです。入れる。よく考えると、入って溺れたらどうしようか。それ、教えないけんね。じゃあなんかせないけんね。っていう話の時に、今日の実行委員長の内村さんに、こういう話して、私が・・・プロジェクトチームに入りたいということで、4つほど作った。紫川水先案内人育成塾、紫川ジュニア探検隊、金山川親子ふれあい力ヌー、あともう一つ、何かありましたけど忘れちゃったけども、そういったのをやって要は、川とふれあう、この育成塾っていうのは、ほんとに川の指導者を育成するみたいなところなので、その時にラックの方に来ていただいてラックリーダーの講習したりとか、そうやってやり出したのはその事業が始まる3年後ぐらいから、実は2年ぐらいは手探りなんで、僕らも知識がないで、体験活動をやってました。そこで、ラックリーダーの講座とかを聴いて、俺たちやばいこと

やってたんやね、すごいリスクかかえて、全然知らんままやっていたっていうのがわかったので、非常に、活動でのきっかけになったし、ラックさんの方には非常に協力していただいたんで感謝しております。ありがとうございます。

○コーディネーター 平山氏

はい、ありがとうございます。実は、内村実行委員長ですが、長いことラックの常任理事務めていただいて部会長をお務めいただいて、このラック全体の発展にもご尽力をずっといただいている、それがあって、今日また、この北九州で全国大会開催させていただくことになりました。それでは、もう一つなんですね、川への愛着っていうお話が泊さん、ありましたね。今日ちょっと佐藤陽平さんから先ほどもご報告があったんですが、もし、いらしていれば、お話をうかがいしたいと思います。今日ボートで、いろいろご説明をいただいた語りべで、ご参加いただいた方、語りべ方々いらっしゃいますでしょうか。お見えになってないです。もしいらっしゃれば一言お話をお聞きしたいと思うんですけど。いらっしゃいませんか。残念ですね。じゃあちょっと陽平さん、もう一度その語りべの方に変わって、愛着の話を少ししていただければと思います。

○第二分科会 佐藤氏

今回の語りべの皆さんが、なんで始めたのか、今回まずやってみた。しかも、一回目なんです。そのことを質問させてもらったときですけども、内村さんにやれって言われたじゃないですけど、最初の一步はそうだった。こういう機会があるからどうかなという相談を受けたということです。そこで、自分たちが伝えたいことであったり、橋の名称から、自分たちの町について、学んでっていう機会が生まれたっていうことをおっしゃってました。やっぱり自分たちはプロでもないし学んだばかりなので、これから皆さんに伝えていくっていうことも伝わりづらいかもしれない。でも、大切なことは自分たちが今を楽しもうっていうことを話していたことが印象的でした。後ろ向きになると、これもできない、あれもできない、だから自分たちがここまでしかできないねっていう感覚になってしまうんですけども、皆さんはとも前向きで、まずやってみようかなっていう一歩が生まれたことが良かったんじゃないかなという、いって見たら川で落とすみたいなもんですよ。やったらどうみたいな。そういうきっかけがあったことによって、自分たちが知らなかった、気づきっていうことが、生まれてより、愛着に繋がったっていうのが今回の流れでもあったのかなというふうに思ってるところです。あと、やらない人たち愛情っていうのを無関心の人たちですね。ラックで考えると川に学ぶ社会を作りたい訳ですから、その無関心の人たちをどのようにして、巻き込んでいくのかっていう考え方あると思うんですけども、人がなぜ行動したいのかっていう考え方があるんです。ご存じですか。なんで行動しないのか。人が行動しない理由、それは、現状に満足しているから、だから人は行動しない。行動するときは危機もリスク、自分の身に何かあるっていうことで行動します。もう一つの行動パターンを、それは楽しいときなんです。楽しさとか、ポジティブな場っていうのは、アクティブに変わります。アクティブの場っていうのはクリエイティブに変わっていきます。ですから、そのまず楽しいそして、現代みたいなリスク、ピンチっていうのは感じられないような社会であれば、楽しいっていうことが、先に出す方が行動が生まれやすいっていうふうに考えられてますんで、僕らは、危機感をあおってやれっていうタイプよりも、なんとなくラックのメンバーで楽しくわいわやって推進していくそういう力もありますので、その楽しさっていうのは大事なんじゃないかな。結果その楽しさによって様々な経験を得て愛情に変わるんじゃないかなというふうに思ってます。

○コーディネーター 平山氏

はい、ありがとうございます。会場の方でこの楽しさ、こんな楽しいからやってるよっていう方、ラックのメンバーでもそうでなくても、結構です。今日いらした方で川塾の方でも、皆さん、どなたかいらっしゃるかもしれませんでしょうか。川での楽しい活動、どうでしょう。皆さんやってるカヌーとか、E ボート、一緒にこいでた方とかいらっしゃるいませんか。ちょっとお名前がわからないかもしれません。わかりました。是非次は、お答えいただきたい。長谷川さん、

ちょっと一言、その楽しさっていう、昨日も発表いただきましたけど、楽しい活動っていうの何かありますか。

○長谷川さん

楽しい活動は、楽しくやれば、そういう気持ちが生まれてくるので、皆さん楽しいことやろうということやってるわけですから、それでいいんですけど、今、佐藤さんがいったように、楽しいことが生まれたときに、それがどういうふうに活かされるとか生きてくるかをやってる人たちが認識する必要がある。楽しんで終わっちゃうとその生まれてきた芽がそのまんま、もとに戻るとかですね、その芽を育てていくっていうことがすごい大事なかなと思っています。うちの活動は、川だけじゃないんですけど、すべてそのことがあっていろんな事が始まる、展開が始まるというふうにして1年間活動してます。それがうちの子たちは会員制で、6年間とか来てまして、6年間来るのも楽しいか、だけどこちらは、いろんな仕掛けをしています。子供に取っては楽しいのが大事だと思ってます。

○コーディネーター 平山氏

はい、ありがとうございます。楽しいことがきっかけで始まって、その楽しいこと、その活動がどうやって役立っていくか、リーダーとしては指導者としてはしっかりと認識をして活動していく必要がある。ありがとうございました。第一分科会なんですけど佐藤さんちょっといい足りなかったこととか、防災のことでもう少しこんな話とかありますか。

○第一分科会 佐藤氏

持ち出しの話があったんですけど、これは私の実体験なんですけれども、一応、11以外甚大ではなかった、準被災地域に住んでおりまして、それ以来もし何かあったときに自分がお家に帰れるようにグッズというものを作って置いてたんです。職場に。つい最近までいた職場にも一人足下にちっちゃい・・・があって皆にこれは何って聞かれたんですけど、中身は、例えばハイヒールで会社に行ってる時に歩いて帰る事になったときにすぐ使える靴とか、靴下とか、軍手とかどんなものが入っているかを広げたらみんな何それって、いって盛り上がりつつあったんですけども、同じ経験をしているにも関わらず一般の方々、言い方したら失礼なんですけれども、その方々には、あんなめにあっても、まだ浸透していないのかっていうところで、愕然とした思いがありました。第一分科会で、自助の話になったときに、避難するときの準備の話、山下さんされてましたけど、避難袋を割ってでも取りやすいところに置いておくそれが、まだ根づいていないことに驚いてしまいまして、逆にラックの活動をしている方からすれば、当たり前じゃんそれ、っていうこのギャップを埋めなければいけないと思っていたところに、今回このお話をいただいたので、皆さんでいろんな決断力を出す、目的ではなかったんですけど、こうしたら自助につながるんじゃないかとか、そういうお話が、できたことが非常に良かったと思いますし、なにより、山下さんの実体験に基づいた話、ご自宅の写真まで、見せていただいて、危機迫るものがあるって、たいへんな思いをされたんだなってことが、伝わってきましたので、是非皆さんなり人ごとではなくニュースでその流れてこなくなったからといって忘れるのではなく、よりラックの会員として、どうあるべきか、どうしてそういう人たちを持ち上げていかなければいけないのかっていうことを日々考えて活動していただけたらなというふうに思いました。

○コーディネーター 平山氏

はい、ありがとうございました。それでは続いて、最後に一言ずつ、もう何でも結構です。今回の分科会のことを一言ずつお願いします。時間がもう10分ちょっとしかありませんので、ぐるっと一言ずつおうかがいをしていきたい。山下さんからお願いします。

○第一分科会 山下氏

一分くらい。私は、今壇上で偉そうにしゃべらしていただいていますけれども、自然体験活動に入らしてもらって、まだ、たったの5年です。今ラックトレーナーをさせていただいてますけれども、下手な企業研修を受けるよりもラックのトレーナー、インストラクター、リーダーそこから初めてみられることをまず、おすすめします。素晴らしい内容です。そこで私は、セルフレスキューファースト、自分の命が一番大事だということを学びました。そして自然体験のすばらしさ、自、分という言葉は、自然の分身です。自然体験活動を通して危険箇所を知り、自分自身が、自然の分身だということをしっかり認識できれば、自然の災害に対応できると思います。災害に対応できないのは自然の営みを理解していない、畏怖と畏敬の念をもって日頃の生活をしていないだと気づきました。なので是非、皆さんラックの会員でない方は、これからラックに入られてください。よろしくお願いいたします。以上です。

○第二分科会 佐藤氏

先日、私が住む臼杵市、大雨が降って、私の家も後、5センチ床下浸水っていうことになりました。私は、子供たち、自分の息子たちに、まわりに困っている人がいるんじゃないかっていって探した。近所に声をかけてまわった。隣のお父さんと一緒にそういうふうやっていてあるおばあちゃんが、動けなくなった。もう避難できない状態です。道路の水は、20、30センチまで上がってきてますんで、実はそういう所もあって長男がそこで、おとうちのカヌーやっていて、僕はフィッシングタイプを持っていたので、それを引きずり出して、おばあちゃんをレスキューしてってということで、僕自身そこで感じた事は、子供たちの場合、体験値を増やしていくと困った人とかそういうところに視点を持って行けるようになっていくんだなっていうことを感じました。様々な問題とか、一寸先闇ですから、何が起こるかわからないっていうことを踏まえていただき、共同の町づくりを僕はキーワードになると思ってて、それぞれの得意分野を行政も民間も市民もそこで自分たちがこれからどうあるべきかっていうありたい姿を想像しながら一歩っていうのをやっていかないと一寸先がもしきたときには、どうできるのか、できないのか、なかなか行動できないのかなっていう、さらにそこに一つ必要なのは体験教育だと思います。自分自身の身を守れるっていうことを体験していると恐れるよりもしっかりと動けるようになった。うちの長男まだ、小学校6年生ですけども、そうやって人を助けるところまでできた、っていうのは私自身も皆さんとラックっていう所に所属できたからよかったなあというに思ってます。是非とも、入信・・・また全国大会来年あると思いますので、来ていただいて親交を深められればと思います。以上です。ありがとうございました。

○安田先生

今回、石組みを中心に講座とか設けていただきほんとにありがとうございます。やはり川の本来の、流れっていうものを、皆さんという探検ってものの大切さを語っていただいていると思いますが、体験を増やすことによって、日本ていろんな感覚を身につけることができると思います。是非、小さい子供から若い大人まで、素朴なところから身近なところから経験をどんどんどんどん増やして行って、やがて大きい河川につながられるような、そのために助ける事ができれば協力させていただきたいなと思ってやらせていただきました。貴重な体験ありがとうございました。

○第三分科会 橘氏

少し、ふと思い出したことですが、この分科会をやるために安田先生と少々打ち合わせ等をしてる中で、安田先生が壊したら直せばいいんだってそう気軽にいったのをふと思い出しました。先ほど平山さんのほうから、体験を子供たちにできないかの話でふとそれを思い出したんですが、堰、段差の高さが低くなれば、そんなに大きくない石でも作れる、石、いろんなところに転がってます。入手がどこだ、すごい難しいものじゃないです。壊れたら直せばいいんじゃないと思えば、体験でどんどん作って、失敗したじゃあどこが悪いんだ。そこで体験しながら学びながらやっていけばいいのかなっていうことを、思いつきましてこの全体会の中で発見があった大会でした。

○コーディネーター 平山氏

はい、泊さんお願いいたします。

○第四分科会 泊氏

最後なので緊張しますが、町づくりっていろいろみて非常に難しいっていうのがわかりました。私普段、公務員です。市役所で働いています。思ったんですね。公共空間で、一つの不動産王じゃないのかなて、私、道路もやってみました。川もやってみました。後他には、公園とかもありました。すごく面的、面的に考えると広い不動産王じゃないかと。なので、その不動産、その公共空間を行政がたまたま管理しているだけなんです。誰か管理しないとイケない。でも、本来は市民の皆さんが使っているものなんじゃないかな。そのかわり、ルールを守れば、私は、皆さんに伝えたいのが、公共空間を使いたおしてください。そして一過性のイベントだけではなくて、継続的な取り組みをしていくことで、365日、内村がよくいってました。川が賑わう、ただ賑わうだけじゃなくて、シビックプライド、市民が北九州の川ってすごい賑わって、この町に住んでると、いつも楽しいことがあるねっていうふうに市外の人にかってにピーアールしている状態。ようは市民一人が、一人一人がピーアール隊になっている状態それが私の夢です。最後、田中さんの言葉です。川をコンテンツにしてもっとよりよい物に変わっていきそれが私の伝えたいことです。以上です。

○コーディネーター 平山氏

はい、ありがとうございました。皆さんからいろいろお話をいただいたところですがそろそろ時間になってまいりました。4つの分科会それぞれテーマも違う、進行も違いなかなか内容しっかりと聞きできないところがあって、大変申し訳ないなと進行担当した者としては思っています。ただ、どの分科会でも参加された方々が一生懸命やっている、楽しんでおられる写真を拝見して、きっとその中で、お話いただいたことが皆さんのこれからの活動に役立っている。そういうふうに思いました。最後に、こういうこともあるなと思ったことが一つあります。語りべで乗って下さった方が、紫川ではないけど隣の川で川をきれいにする活動をしているんですよ。環境保全しています。子供を連れて遊ばせてる話をされている方がいまして、やっぱり体験させにゃいかんよねとお二人でずっと話しているんですね。限界はあるけどできるくらいのことはどんどんやらしたほうがいいわ、今やってんのよ。二人で、いっぱいお話をきかせていただいたんですよ。それから、昨日の魚部の方、そうですね。私なんか都会の川ですから一緒なんですよやってることは。みんなラックと一緒に、たまたまライジャケ来てなかったりしてますけど。同じことやっぱりやっている人たくさんいるじゃないかと思ひまして、こういう活動、ラックご存じでしたか。今日初めて来たのよっていわれまして、そういう方が地域に全国にたくさんいらっしゃるんだと思います。もっともっと仲間になんかきゃいけないなと思ひました。今日それが一番、なんかもっと仲良くなってライフジャケット普及させて広めなきゃいけない仲間増やしていざというときに役立つようにしなきゃいけない、ほんとに思ひました。それが今日の私の収穫かなと思います。すみません、そろそろ時間がきましたので、これもちまして終了いたします。どうも皆さんありがとうございました。

第 17 回 川に学ぶ体験活動全国大会 in 北九州 実行委員会名簿

番号	職 名	氏 名	所属先 / 勤務先	
			所 属	職 名
1	実行委員長	内村 政彦	NPO法人川塾北九州	代表理事
2	副実行委員長	久住 時男（見附市長）	NPO法人川に学ぶ体験活動協議会	RAC代表理事
3	副実行委員長	西胤 正弘	もじ少年自然の家	所長
4		藤芳 素生	NPO法人川に学ぶ体験活動協議会	副代表
5		大井 里美	NPO法人川に学ぶ体験活動協議会	事務局
6		松永 勝行	リバークラブ紫川	会長
7		中村 哲也	リバークラブ紫川	会員
8		富眞 幹治	リバークラブ紫川	会員
9		藤丸 正司	ふくおかの川と水の会	理事
10		泊 伸明	NPO法人川塾北九州	理事
11	会計	幡手 京美絵	NPO法人川塾北九州	会計
12		上原 浩二	かぐめよし少年自然の家	所長
13		村岡 学	玄海青年の家	副所長
14	交流会会長	鶴喰 誠	北九州キッチンカー実行委員会	副会長
15		新井 義則	紫川マイタウンの会	会長
16		岩田 奈美子	北九州アーバンサップ協会	代表理事
17		中山 歳喜	北九州ビオトープネットワーク	代表
18		中島 忠	国土交通省 遠賀川河川事務所	調査課長
19		宮内 信	国土交通省 遠賀川河川事務所	専門官
20		中川 順野	福岡県 県土整備部 河川課	企画調査係長
21		畑田 紀和	福岡県 県土整備部 河川課	主任技師
22		大部 俊介	北九州市 建設局 総務課	主任
23		澤田 尚人	北九州市 建設局 河川部 水環境課	企画調整係長
24		内田 和馬	北九州市 建設局 河川部 水環境課	職員

第 17 回 川に学ぶ体験活動全国大会 in 北九州（紫川流域） 報告書

発 行

第 17 回 川に学ぶ体験活動全国大会 in 北九州（紫川流域） 実行委員会

TEL 090-4582-9090 / FAX 093-451-4587

〒803-0266 福岡県北九州市小倉南区道原 231-1